

COC+R 事業報告書 2021-2022 PENTAS YAMANASHI

未来を見据え 学問のさらなる探求と 研究・教育力の向上による 新たな価値の創造を

事業責任大学
山梨県立大学
学長 早川 正幸



山梨県立大学は「地域を愛し、地域を育て、地域をつなぐ」をスローガンに、未来を見据え、学問のさらなる探求と研究・教育力の向上による新たな価値の創造を目指しています。

令和2年度に、本学が提案した教育プログラムが文部科学省の「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業(COC+R)」に採択されました。

採択事業の「VUCA時代の成長戦略を支える実践的教育プログラム」は、本学を中心に山梨大学、山梨英和大学の3大学、山梨県、県内の基幹産業関連団体、関連企業が協力して、不安定で不確実な現代社会に対応した高付加価値を持つ人材を養成するために、大学と出口（就職先）が一体となって教育プログラムを構築し、地方創生人材の育成を図ることを目指しております。

令和3年度は本事業の教育プログラムが本格的にスタートし、「観光高度化人材育成プログラム」、「地域づくり加速化人材育成プログラム」の2つのプログラムが開講いたしました。

さらに、令和4年度からは新たに「ビジネス構想力・経営マインド醸造プログラム」、「多文化共生対応人材育成プログラム」、「次代を担うアントレプレナー養成プログラム」の3プログラムが開講し、計5つのプログラム体制が完成いたします。

本事業では外部機関と協働して教育プログラムの開発から修了証の発行までを一貫して行うことにより、学生の地元定着率の向上を図ることとしております。また、このプログラムは社会人にも開放し、学生と社会人の共学に基づく学びは今後の教育モデルとなっていくものであります。また、全国初の大学等連携推進法人として文部科学省から認定された「大学アライアンスやまなし」は、本学と山梨大学との連携により、地域を支える人材育成に寄与することをその目的の一つとしており、連携開設科目としての参加大学への科目開放等を進めることにより、本事業の教育プログラムを大きく発展させていくものと期待しております。

本書は、これらの取り組みの詳細をご覧頂くために「COC+R事業報告書2021-2022」として取りまとめたものでございますので、ご一読頂ければ幸いです。

今後も本事業へのご支援、ご協力をお願いいたします。

目次

00

はじめに

ご挨拶

01

事業概要

目的/育成する人物像/PENTASYAMANASHIについて
事業実施体制/参加校・事業協働機関/COC+Rとは

02

令和2年度活動実績報告

事業体制の整備 / 教育プログラム開発 /
社会人ニーズ調査 / 施設環境の整備 / 広報活動/
会議開催一覧/キックオフイベント開催報告

03

令和3年度活動実績報告

広報活動/履修管理システムの構築/
ハイフレックス型講義施設の設備/
オンライン講義・オンデマンド配信の活用/
数値目標と実績/科目別受講者数/
プログラム実施科目一覧/授業実施報告/
特別授業実施報告/
アンケート調査・ヒアリング調査報告/会議開催一覧/
多文化共生人材育成プログラムキックオフシンポジウム開催/

04

令和4年度に向けての取り組み

事業責任大学・参加校・事業協働機関の取り組み内容/
プログラム紹介/科目一覧/カリキュラムツリー

05

補助事業に関する経費

令和2年度収支報告/令和3年度収支報告

01

事業概要

大学による地方創生人材教育プログラム構築事業

Centers of Community —
Project for Universities as Drivers of Regional Revitalization
through New Human Resources Education Programs



VUCA時代の成長戦略を支える 実践的教育プログラム

目的

学生の能力開発、進路相談、実践活動、資格取得といったキャリアに関わる教育プログラムを学部主導の学士課程教育とは別に設計し、地方創生人材育成のため、大学・企業・自治体・関係団体で協働的に実践教育を行うシステムを構築します。

育成する人材像

「VUCA(Volatility(変動性・不安定さ),Uncertainty(不確実性・不確定さ),Complexity(複雑性),Ambiguity(曖昧性・不明確さ)時代を自在に越境する術」の習得により、学生自身が今後のセカンドキャリア・サードキャリア、社内起業・新企画開発など高付加価値人材となることを目指します。

また、スキルアップを目指す社会人に対しても展開し、学生・社会人の垣根を超えた地方創生人材の育成に取り組みます。

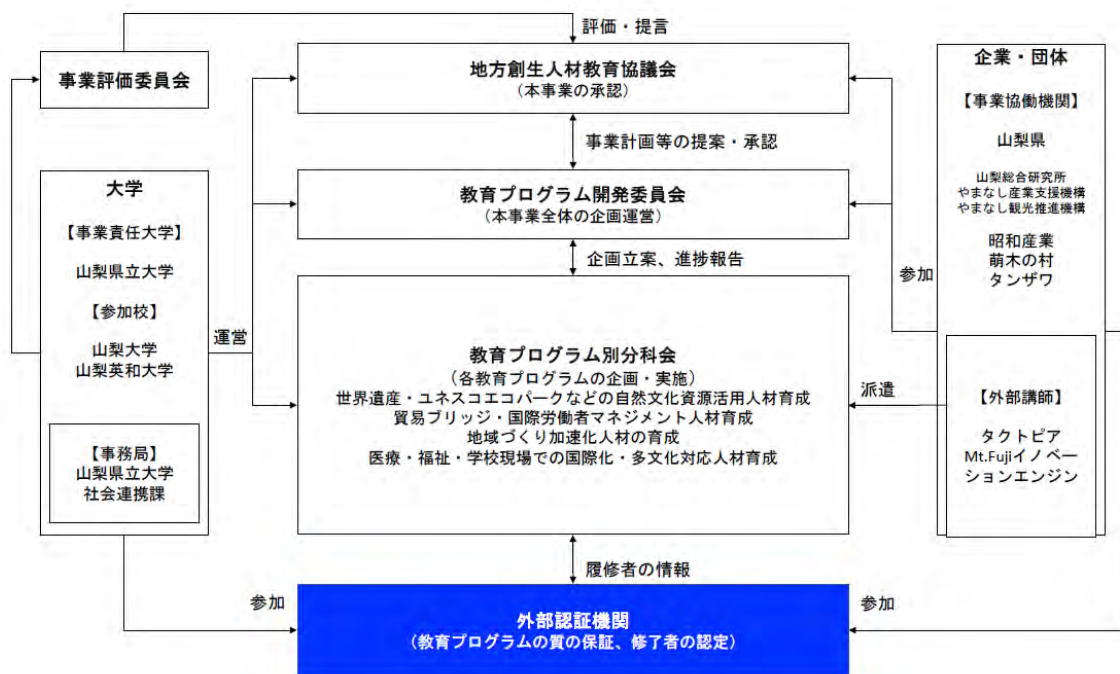
PENTASYAMANASHIとは？

「PENTAS YAMANASHI」は、山梨県立大学「VUCA時代の成長戦略を支える実践的教育プログラム」の事業通称名です。PENTASは夏に星形の花を無数に咲かせる常緑性の宿根草で、花言葉は「希望が叶う」「願いごと」「博愛」です。英語では星形の花が半球状に咲く様子から「Star cluster（星団）」とも呼ばれています。

本事業を通して、受講生の皆さんが山梨の地からそれぞれの希望を叶えていくことを願って、この名称がつけられました。

事業実施体制

【計画当初：本事業の連携図】



参加校

- 山梨大学
- 山梨英和大学

事業協働機関

- ・ 山梨県
- ・ 公益財団法人山梨総合研究所
- ・ 公益財団法人やまなし産業支援機構
- ・ 公益社団法人やまなし観光推進機構
- ・ 株式会社タンザワ
- ・ 萌木の村株式会社
- ・ 昭和産業株式会社

COC+Rとは？

文部科学省では、令和2年度から、地域の知の拠点としての大学が、他の大学等や地方公共団体、地域の企業等と協働し、地域が求める人材を養成するための教育改革を実行するとともに、出口（就職先）と一体となった教育プログラムを実施することで、若者の地元定着と地域活性化を推進する「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）」を実施しています。地方創生に向けては、当該地域にある高等教育機関が核となって、その地域の経済圏における教育と職業、教育と新たな産業を結びつけていく活動が不可欠です。人生100年時代においては、高等教育機関には多様な年齢層の多様なニーズを持った学生を教育できる体制が必要となるため、いわゆる就職氷河期世代も含めた様々な社会人に対しても受けやすく即効性のある出口一体型人材養成の確立が求められています。

02

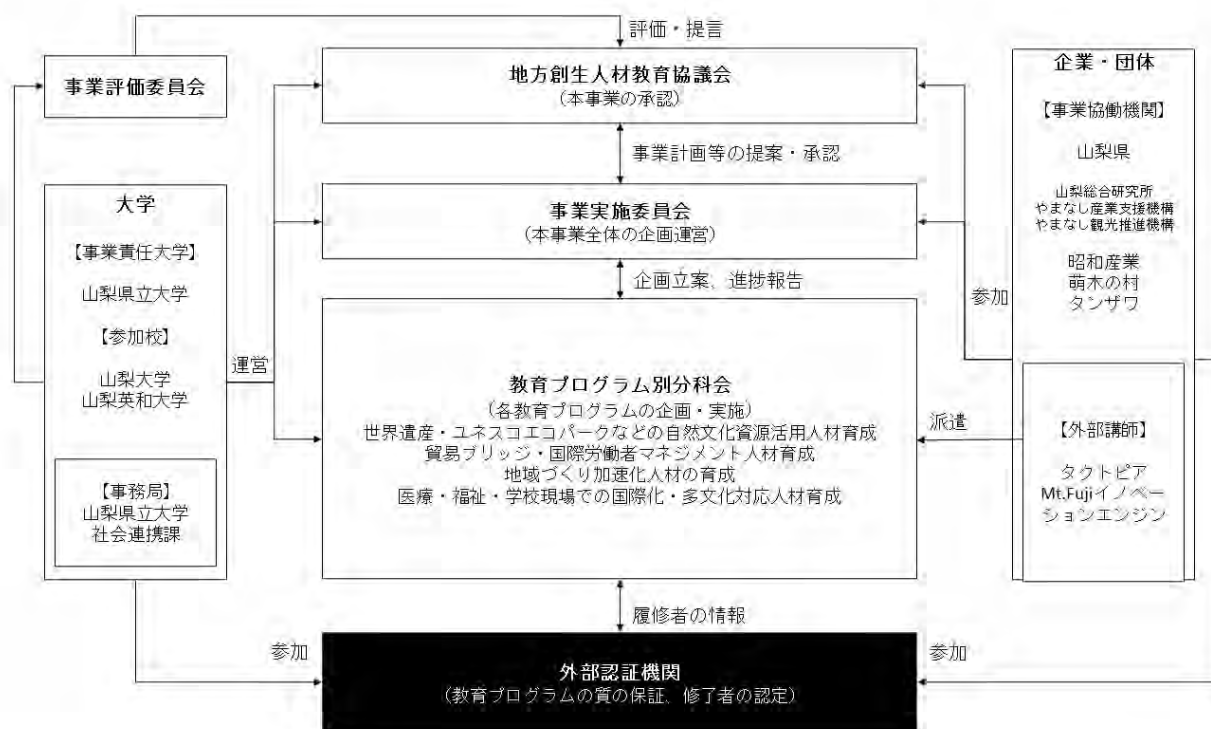
令和 2 年度活動実績報告

令和3年度の新プログラム開講に向けて、学内施設の整備、COC+R運営組織体制の構築及び、プログラム開発を行った。以下のとおり、活動実績を報告いたします。

1. 事業体制の整備

本事業を推進するため、令和2年12月に本学内に「山梨県立大学地方創生機構」を設置し、各事業協働機関との間において本事業に協働して取り組む協定書を締結するとともに、全事業協働機関のトップにより構成される「地方創生人材教育協議会」、事業のチェック組織である「事業評価委員会」、実質的な検討組織である「事業実施委員会」、教育プログラムの企画運営を行う「プログラム検討委員会」、「教育プログラム別分科会」及び「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業タスクフォース（TF）会議」を開催し、事業協働機関との協議を踏まえながら本事業を実施した。また、令和2年12月に「山梨県立大学「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」の実施に関する規程」を制定し、当初の計画から体制を変更し下記の図の体制により実施している。

【本事業の連携図】



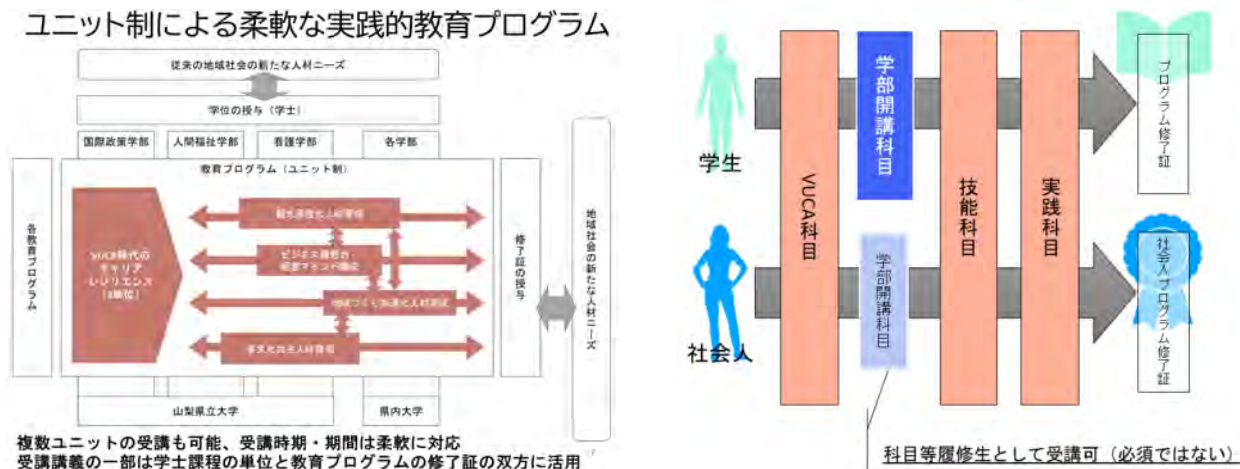
2. 教育プログラム開発

- (1) 令和3年3月までに、従来の大学の枠を超えた地方創生に資する新たな教育プログラムの構築に向けて、参加大学、事業協働機関及び関連する民間企業等との協議・調整を行い、必要となる機材の準備、コーディネータの配置等を進めた。

- (2) 本事業は山梨県立大学を中心に甲府市内3大学、山梨県庁、基幹産業関連団体、関連企業(観光業、農業、製造業等)が協力して地方創生人材の育成を図る教育プログラムである。「観光高度化人材プログラム」「地域づくり加速化人材の育成」「貿易ブリッジ・国際労働者マネジメント人材育成」「医療・福祉・学校現場での国際化・多文化化対応人材育成」の4プログラムを、副専攻課程として設置する。

外部人材の積極的な登用と外部機関との協働による教育プログラム開発を特徴とし、外部機関による修了証を発行することで地元への定着率の向上を図る。プログラムは社会人にも開放し、リカレント教育にも位置づける。

ユニット制による柔軟な実践的教育プログラム



- (3) 令和3年6月開講を目指し「観光高度化人材育成プログラム」「地域づくり加速化人材育成プログラム」の2つの教育プログラムを開講準備を進めた。

観光高度化人材育成プログラムは、甲武信ユネスコエコパークでのフィージビリティ調査を実施、深草観音(大学生との走行実験)、要害城(甲府市教育委員会との資源調査)、甲府北山ルート(地場系企業との事業化調査)、山梨県立大学内で意見交換会・模擬講義を行った。

地域づくり加速化人材育成プログラムでは、地域おこし協力隊に必要な能力・条件、自治体職員に求められる能力・条件等の市町村におけるニーズ調整を行った。

観光高度化人材育成プログラム

プログラムの目的 地域資源の活用方法を学び観光の高度化を図る事ができる人材を育成

本プログラムは、地域資源の活用方法を学び、観光の高付加価値化を図る人材の輩出を図るために実施致します。山梨県観光部とともに運営してきた副専攻課程「地域通訳案内士」をもとに、新たな地域資源を対象に、教育プログラムを開発し、大学生はもちろん、広く一般社会人向けにも開放していきます。また、山梨に適したネイチャーガイドを普及し開発するため、実務家や専門家から本県の自然・歴史文化財の活用方法を学んでいきます。

地域づくり加速化人材育成プログラム

プログラムの目的 地域づくりの中心を担い、社会変革力の醸成を担う事ができる人材の育成

本プログラムは、今後の地域づくりの中心を担う人材育成を行うため、公務員志望学生に対してより実践的な公務員にとって不可欠な動機づけ、社会変革力の醸成を担います。試験の点数よりも実践的な企画立案能力やインターンシップに近いかたちで実際の現場を体験し、高いコンピテンシーを身に付けた公務員を増やすための一助とします。

3. 社会人ニーズ調査

令和2年度「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業」の採択を受けて、次年度より教育プログラムをスタートするにあたり、国内外における社会人の学び直しに資する実践的な講座の事例を調査し、その概要や具体的な成果などを明らかにすることにより、本事業における教育プログラムの質の向上を図ることを目的とする。

リカレント講座に対するニーズ動向調査

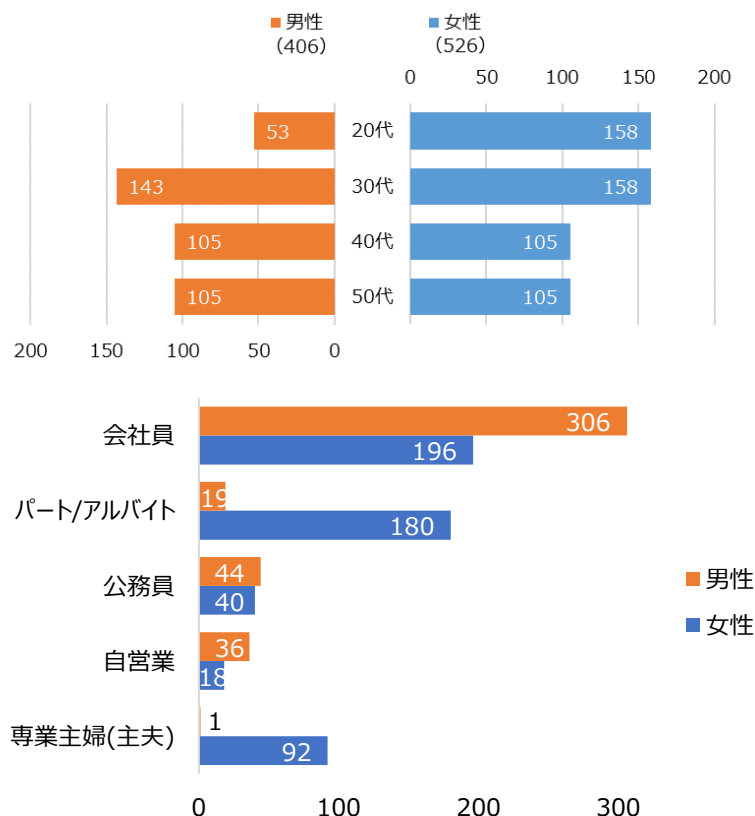
人生100年時代と言われる中で、社会人のキャリアアップやキャリアシフトを目的としたリカレント講座に対する社会人のニーズの動向について把握するために、アンケート調査を行った。

1. LINEリサーチ・モニターアンケート調査

(1) 調査手法・対象・期間

調査方法	LINE リサーチを利用したモニターアンケート
調査対象	山梨県内在住の25歳～54歳
調査期間	2021年2月17日～2月20日
回答数	932（希望回答数1000）

(2) 回答者の属性



(3) 調査結果

ア. 各クラスターの特徴

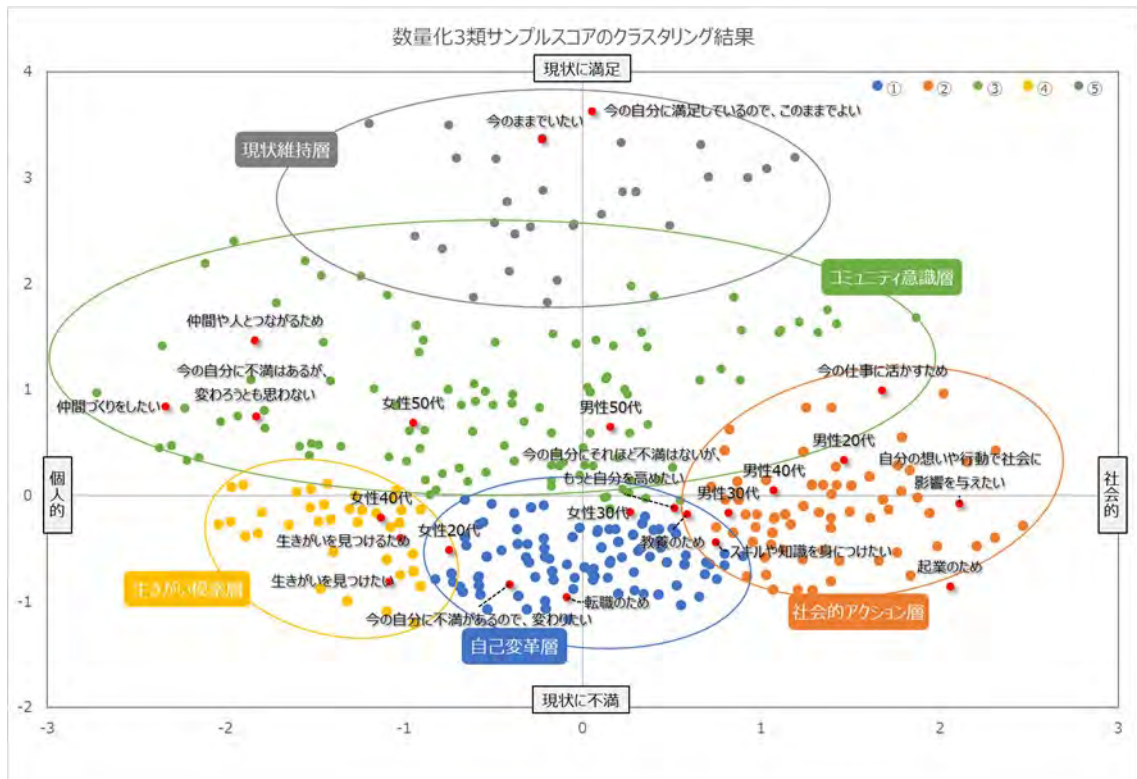
数量化3類及びクラスター分析により判明した、5つのクラスターの特徴を以下にまとめる。

	性別・年代	今の気持ち	今後	学ぶ目的
クラスター①	女性 20～30 代が比較的多く、男性 20 代が少ない。	自分に不満があり変わりたいという人が多い。また、不満はないが、自分を高めたいという人も比較的多い。	スキルや知識を身につけたいが最も多く、次いで生きがいを見つけないという人が多い。	生きがいを見つけないためが半数にのぼるが、転職のため他に比べて多くなっている。
クラスター②	男性(特に 20～40 代)が多い。また、女性の 30 代も多くなっている。	自分に不満はないが、自分を高めたいという人が多い。	スキルや知識を見つけないが最も多い。また、自分の想いや行動で社会に影響を与えたいという人が他に比べ多くなっている。	今の仕事に活かすためが最も多いが、起業のため他に比べて多い。
クラスター③	男性 50 代と女性 50 代が多くなっている。	自分に不満はないが、自分を高めたいという人が多い。また、自分に不満はあるが、変わろうと思わない人も他と比べると少し多い。	特に偏りはないが、他に比べ仲間づくりをしたいという層が多い。	仲間は人とながるためという人が他に比べて多い。
クラスター④	女性が大半を占めており、特に女性の 20 代が多くなっている。	自分に不満があり、変わりたいと考える人が多い。	生きがいを見つけないという人が大半を占めている。	生きがいを見つけないためが大半を占めている。
クラスター⑤	特に偏りはない。	自分に満足しており、このままでよいという人がほとんど。	今のままでいたいという人がほとんど。	今の仕事に生かすためが最も多く、次いで生きがいを見つけないため、仲間や人とながるためとなっている。

イ. 各クラスターのプロファイリング

分析から得られた特徴をもとに、各クラスターを次のとおりプロファイリングした。

クラスター① 自己変革層 ● 自分に不満があり、自分の変革を望む ● スキルや知識を身につけた後、転職などの変化を経て、生きがいを見つけないと考えている ● 20代～30代の女性が多い	クラスター② 社会的アクション層 ● 自分に不満はないが、自己啓発意識が高い ● スキルや知識を身につけた後、現在の仕事や起業を通して、社会に何らかのアクションを起こしたいと考えている ● 20代～40代の男性、30代の女性が多い	
クラスター③ コミュニティ意識層 ● 現状に対する不満は少ない ● 個人的な興味・関心が幅広く、それを通してコミュニティ意識が強い ● 50代男性、50代女性が多い	クラスター④ 生きがい模索層 ● 自分に対する不満が大きい ● 何かしらの生きがいを見つけないと強く考えている ● 女性、特に20代の若い人が多い	クラスター⑤ 現状維持層 ● 現状に満足しており、変化を望んでいない ● クラスターとしての母数は少ない



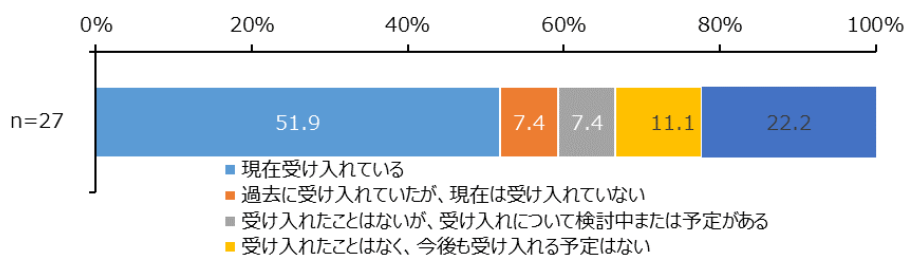
2. 自治体へのニーズ調査

(1) 調査手法・対象・期間

調査方法	郵送
調査対象	山梨県内27市町村
調査期間	2021年3月12日～3月17日
回答数	21

(2) 調査結果

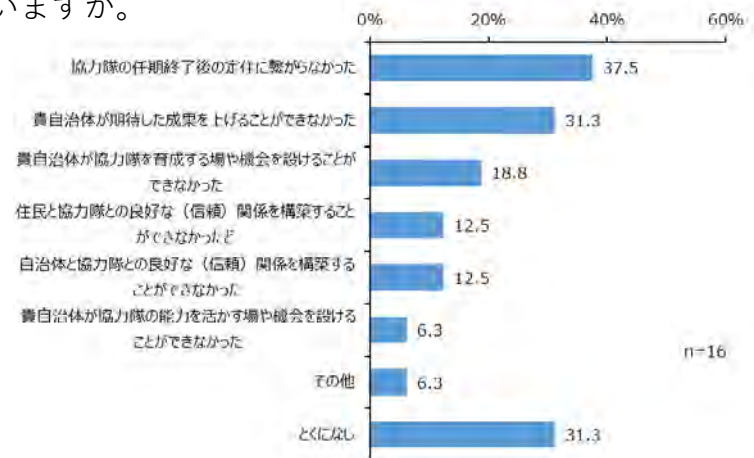
問1 自治体では、地域おこし協力隊を受け入れていますか。



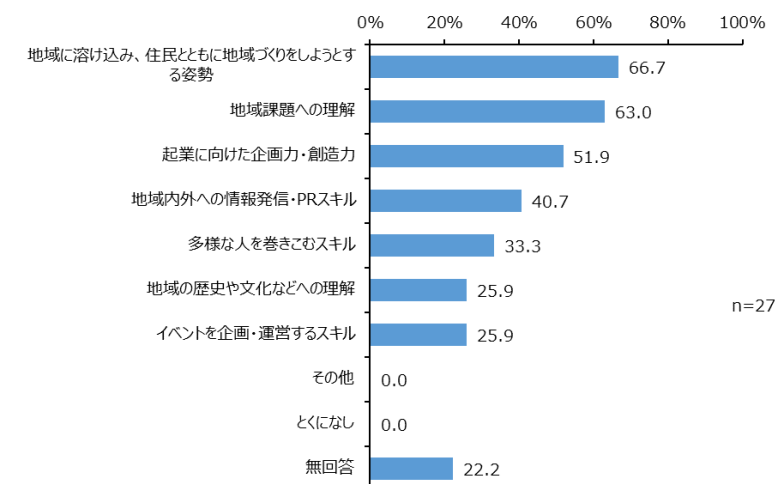
問2 貴自治体では、地域おこし協力隊はどのような活動を行っていますか。



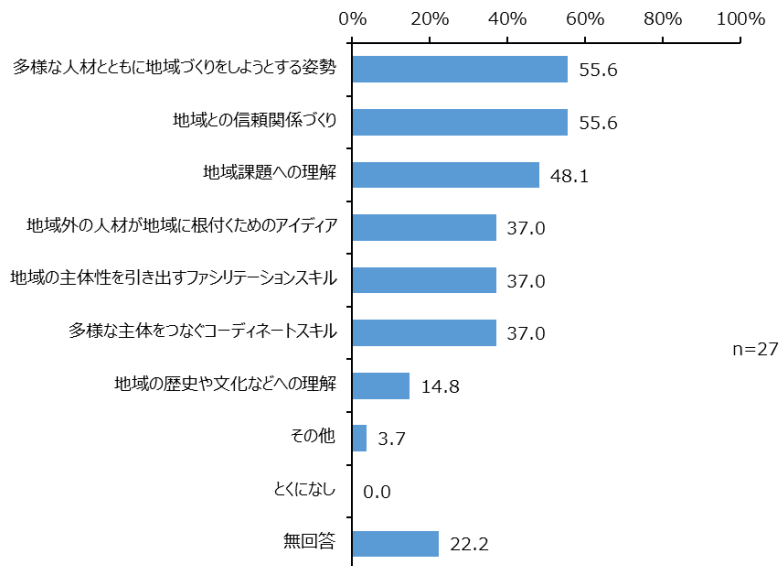
問3 地域おこし協力隊の活動において、『問題点』があったと考えていますか。



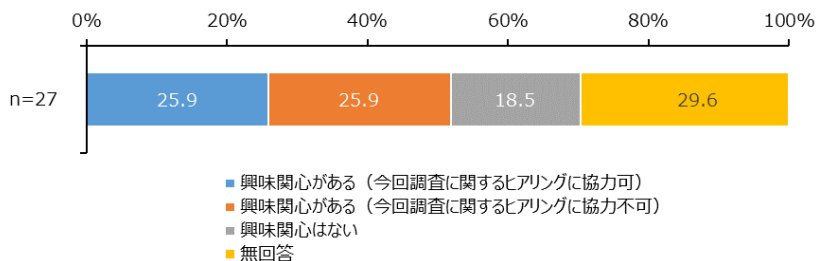
問4 地域で活躍するために『地域おこし協力隊に必要な能力・条件』はどのようなものだとお考えですか。



問5 地域外からの多様な人材が地域で活躍するために、『自治体職員に求められる能力・条件』はどのようなものだとお考えですか。



問6 貴自治体では『多様な人材の共創による地域課題の解決に向けた講座』に職員や地域おこし協力隊を派遣することについて、どのようにお考えですか。



(2) まとめ

地域おこし協力隊は、回答自治体の約6割で受入れており、活動内容としては、「農林水産業」が約9割、次いで「観光」が約5割となっている。活動において問題点があったと考えているかを問う設問では、「特になし」が約3割、次いで「定住に繋がらなかった」が4割弱となっている。

また、地域おこし協力隊に必要な能力・条件は、「住民とともに地域づくりをしようとする姿勢」が7割弱、次いで「地域課題への理解」が6割強となっている。一方、受け入れる側である自治体職員に求められる能力・条件は、「多様な人材とともに地域づくりをしようとする姿勢」と「地域との信頼関係づくり」が5割半、次いで「地域課題への理解」が5割弱となっている。

さらに、来年度新設する講座に職員や協力隊を派遣することについては、約5割が「興味あり」としている。

このことから、新設する講座への興味が高いことが伺える。また、講座内容には多様な立場の人と連携して地域づくりをしようとするノウハウや地域課題への理解を深めるなどの観点が求められていることが伺える。

本教育プログラムへのフィードバック

以上の調査結果を通じて得られた知見から、本教育プログラムのターゲット（想定受講者）やその目的、期待される成果（知識・スキルの習得、資格の取得など）について把握する。それを踏まえ、本教育プログラムを構築する上での基本的な考え方やプログラムの方向性や、本教育プログラムを開発する上で留意すべき点や重要となるポイントなどについてまとめる。

1. 本教育プログラムのポジショニング：なぜ学ぶか？

従来の学びでは、学ぶことや集うこと自体を目的とした生涯学習や、自分のキャリアに活かすことを目的としたビジネススクールや資格取得講座が中心であるのに対して、本教育プログラムは、持続可能な社会の創出を通じて自己実現を目指す方向性を明確にすることが重要となる。

それは、従来の「わたし」という個人のキャリアや利益から、「わたしたち」という社会全体の利益をより意識した学びの場であり、それによって、SDGsという社会的価値によってつながる新たなコミュニティを形成することである。

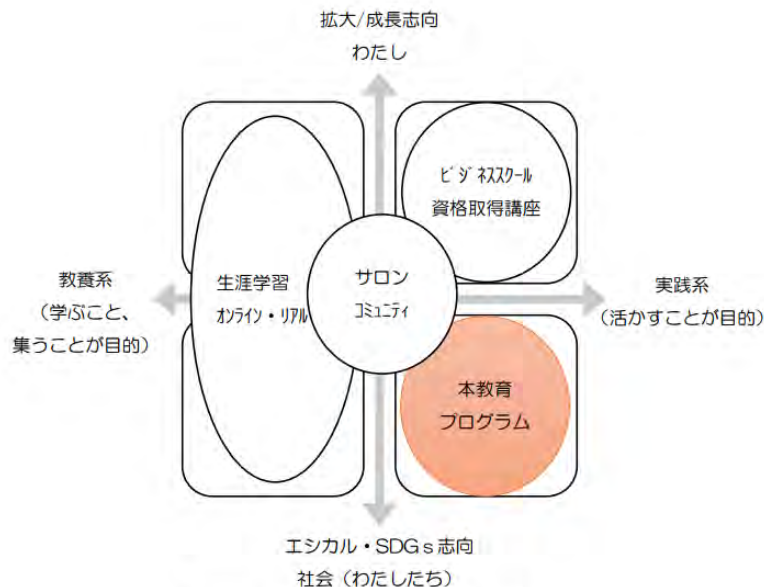


図 12 本教育プログラムのポジショニング

具体的には、以下の点から学びの場づくりを目指すことが想定される。

(1) 自立・アイデンティティの確立

既存の社会のしくみの中で与えられた役割を果たすことで社会に適合する生き方に、なにか「もやもや」を感じている。その「もやもや」と改めて向き合うことで、自らがやりたいこと（WILL）と社会において自らが果たすべきこと（MUST）を再認識することで、自分と社会との関係を見直しながら、実践のための知識やスキル（CAN）を学ぶための場であることを明確に提示することが重要である。

それにより本教育プログラムでは、個人の教養を高めることを目的とした生涯学習やノウハウやスキルを磨く資格取得やビジネススクールとの差別化を明確にすることが考えられる。

(2) 多様性の中での対等な関係づくり

「わたしたち」という言葉に象徴されるように、特定の個人や団体の利益を追求するのではなく、社会全体の利益を中心に据えながら、持続可能な経済活動を行っていくための基盤となる関係づくりを目指すことが重要である。それは、従来のクローズドなつながりではなく、開かれた社会における多様なステークホルダーとの対話を通じて、お互いの利害を調整することが重要となる。そのため、本教育プログラムでは、定型化・形式化された知識やスキルを身につけるのではなく、多様性の中から新たな答えを導き出していくためのコミュニケーションや合意形成の方法論などを重視することが考えられる。

2. 本教育プログラムのターゲット：誰が対象か？

本教育プログラムのポジショニングに対応して、ターゲットとなる受講者層を明確にする必要がある。本教育プログラムのポジショニングとモニターアンケート結果によるクラスター分析で明確となった5つのターゲットとの対応関係は、以下の通り整理することができる。

クラスター①の自己変革層は、ビジネススクールや資格取得講座といった自らを高める方向性と親和性があるのに対して、クラスター③のコミュニティ意識層は、多様な学びを通じたコミュニティへの参加という点から、生涯学習との親和性が高いとみられる。

一方、本教育プログラムについては、社会変革に対する意識が高いクラスター③の社会的アクション層が主たるターゲットとなると考えられる。この層に訴求力を持つためには、個のスキルアップという視点ではなく、社会に対する問題意識に基づいたプログラムデザインが必要であるとともに、それにより身につけることのできる能力やスキル、さらにそれにより目指すべき持続可能な地域社会の姿といった学びの方向性を明確に示すことが必要である。

また、自分自身の生き方やキャリアについて疑問を抱くクラスター④生きがい模索層は、現時点では本教育プログラムの中心的なターゲットではないものの、自分自身のやりたいことと社会問題が結びつくことで、クラスター②にシフトする可能性があると考えられる。そのためにも、サロンのような対話の場におけるピア・ラーニングやピア・カウンセリングなどを通じて、個と社会とのつながりについて気づく機会を設けていくことも重要である。

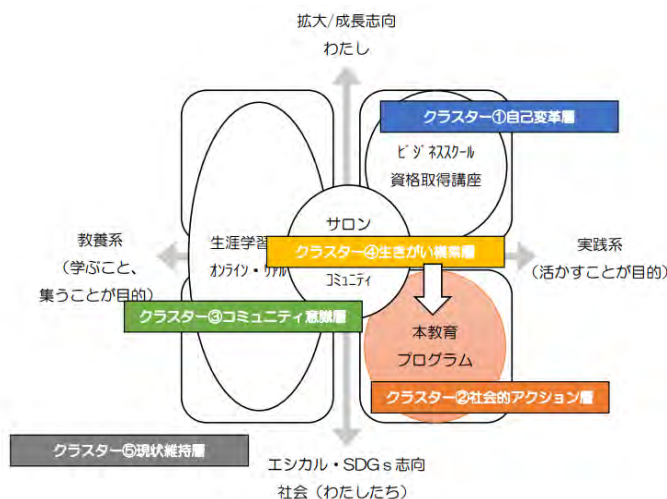


図 13 本教育プログラムのターゲット

具体的には、各ターゲット層に対して以下の点から訴求力のあるプログラムを提供することが想定される。

(1) クラスター②社会的アクション層

この層は、一定程度社会についての問題意識を持っていると考えられることから、まずは、その問題意識の深化につながる学びの場が必要である。さらに、その問題が生じている背景や構造について把握するとともに、既存の社会システムや制度が抱える問題の本質を理解することが重要である。それに基づいて、既存の解決方策とは異なる新たなソリューションを見いだすための知識・スキルを身につける場を提供することが、この層に対する訴求力となると考えられる。

さらに、こうしたソーシャルイノベーションに向けた取り組みに対して、必ずしも地域社会から十分な理解や協力を得ることが難しいことが想定される中で、個々の活動をエンパワーするしくみや、同様の価値観を持つ人々がつながることでお互いに支え合い協力し合えるコミュニティを形成することも、本教育プログラムに求められる機能となると考えられる。

(2) クラスター④生きがい模索層

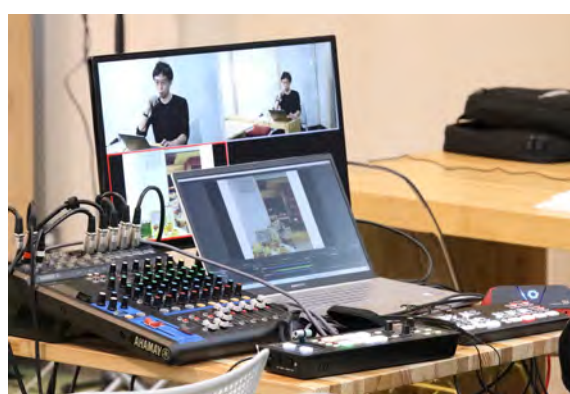
社会との関わりの中で自らにとって大切なことを軸として据えるために、まずは自らについて知る・気づく場づくりが重要となると考えられる。特に、まだ言語化されていない自分自身の「もやもや」と向き合うための場や機会を設けるとともに、その「もやもや」と社会問題とのつながりを明確にしていくことで、新たな行動への動機付けとなる。

この動機付けによって、クラスター②となる社会的アクション層へのシフトが期待される。

4. 施設環境の整備

他大生や社会人が遠隔から受講しやすいよう、ハイフレックス型授業対応の教室を整備した。また、講義だけでなく議論や発表を行い受講者が能動的に授業に参加し、より質の高い教育を行うことができるようアクティブラーニング教室を整備した。

- (1) 飯田キャンパスC館1階コモンスペースに講義のオンライン配信・録画が可能な機材を導入した。



- (2) 池田キャンパスLL教室にアクティブラーニング教室を整備した。



5. 広報活動

事業紹介用Webサイトを構築し、COC+R事業及び教育プログラムの内容について広く周知を図るとともに、大学ホームページやFacebookを活用し活動状況の情報を発信をおこなった。本事業紹介用の冊子（マガジン）や開講科目紹介冊子を作成し、参加大学、事業協働機関を通じて広く学生、社会人に配布することにより、学生・社会人が融合した学びの場構築の為の周知を行っている。また、本事業のイメージを印象付けるためにロゴマークを作成した。

(1) ロゴマーク制作

Desing&Communication 小川晋平氏に「PENTAS」のイメージに合うよう花をモチーフとした制作を依頼し、事業用・スタンプ用・署名用3点のロゴマークの製作が決定した。



【事業用ロゴマーク】



【署名用ロゴマーク】



【スタンプ用ロゴマーク】

(2) 専用Webサイト開設及び申込みシステムの構築
情報発信・参加者募集・情報収集などを
目的としたWEBサイトを構築し、
令和3年3月に開設した。

【専用Webサイト】

URL: <https://www.pentas.yamanashi.jp>



(3) PENTAS Magazine Vol.0の発行

「PENTASYAMANASHI」のPR活動の一環として、定期的にマガジン冊子を発行する。教育プログラム長とゲストとの対談や、PENTASYAMANASHIの概要、プロジェクトコーディネーターからのメッセージを掲載した。



6. 令和2年度会議開催一覧

日付	名称	主な内容
R3.2.18	令和2年度 第1回事業実施委員会	令和2年度地方創生人材教育協議会の開催、 事業協会員の招集、令和3年度の実施体制の 審議
R3.2.24	令和2年度 地方創生人材教育協議会	実施体制、関係要項の制定、地方創生人材教育 プログラム構築に関する協定書、令和3年度事 業計画についての審議

令和2年度 地方創生人材教育協議会（令和3年2月24日開催）

本協議会では、令和2年10月に採択されました文部科学省「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）」の「VUCA時代の成長戦略を支える実践的教育プログラム」を協議する場として、県内大学・自治体・企業団体等で構成された組織本プログラム事業の実施体制及び協定等についての審議が行われるとともに、事業協働機関代表の皆様と様々な意見交換が行われました。

また、令和3年6月の開講に向けて、「観光高度化人材プログラム」、「地域づくり加速化人材育成」の2つのプログラムの進捗状況などの報告が行われました。

1. 日 時：令和3年2月24日（水）13：30～15：00

2. 場 所：山梨県立大学飯田キャンパス A館6階サテライト教室

3. 出席委員：地方創生機構長（議長） 清水一彦、山梨大学 学長 島田眞路、山梨英和大学 人間文化学部 教授 黒田浩司、（公財）山梨総合研究所 理事長 新藤久和、（公財）やまなし産業支援機構 理事長 手塚伸、（公社）やまなし観光推進機構 理事長 仲田道弘、株式会社タンザワ 顧問 堀内久雄（プロジェクトコーディネータ）、萌木の村株式会社 代表取締役社長 船木上次（エグゼクティブコーディネータ）、昭和産業株式会社 代表取締役社長 岩下和彦、地方創生副機構長 相原正志、教育プログラム長 杉山歩、山梨県立大学 国際政策学部長 八代一浩、山梨県立大学 地域研究交流センター長 箕浦一哉、山梨県立大学 事務局長 平塚幸美、山梨県立大学 事務局次長 塚原理宏

4. 審議事項 （1）実施体制について
（2）関係要項の制定について
（3）地方創生人材教育プログラム構築に関する協定書（案）について
（4）令和3年度の事業実施計画（案）について

5. 報告事項 （1）令和2年度の事業実施状況について
（2）事業ロゴとプロジェクト名の決定について
（3）COC+Rキックオフイベント参加について
（4）キックオフイベントの開催について



7. キックオフイベント開催報告

「PENTASYAMANASHI」開講に向けて、令和3年3月23日にキックオフイベントを開催した。基調講演及びパネルディスカッションを行い、当日は人数を限定した対面視聴となり、オンライン配信を活用し多くの方に視聴を頂いた。

(1) 日 時 令和3年3月23日(火) 14:00～17:00

(2) 場 所 山梨県立大学飯田キャンパス C館1階 コモンスペース

(3) 内 容

【基調講演】

テーマ：第9回まちづくり法人国土交通大臣賞

柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社のまちづくりについて

講師：大前貴裕氏(柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社 取締役)

【事例紹介】

①「シャッター商店街に屋台村を！」中心市街地活性化事業「甲府ぐるめ横丁」立ち上げた若きプロジェクトリーダー 甲府のまちづくりについて
講師：青木 はるひ 氏

②COC+R PENTASロゴをデザイン！

アートの視点から考える地方創生について

講師：小川 晋平 氏 (Design & Communication)

【パネルディスカッション】

テーマ：「キャンパスを出る学生、キャンパスに来る社会人
ー地域と大学の繋がリーー」

ファシリテーター：杉山歩 (山梨県立大学 国際政策学部 准教授)



2021年3月23日開催
COC+R
キックオフイベント

パネルディスカッション

<テーマ>

『キャンパスを出る学生、キャンパスに来る社会人—地域と大学の繋がり—』

<パネリスト>

- ・大前 貴裕氏
(株) ミユキデザイン取締役
柳ヶ瀬をたのしいまちにする (株)
取締役
- ・青木 はるひ氏
- ・小川 晋平氏
Design&Communication 代表
- <ファシリテーター>
・杉山 歩
山梨県立大学COC+R
教育プログラム長
国際政策学部 准教授

杉山 歩 (以下杉山) ぼくたちがプログラムでやりたいこと、VUCA時代を自由に生き抜くスキルと自活力とは、ある意味一緒な気もするんですね。これからどういった教育プログラムを作っていくといいのか、一つは学生向け、一つは社会人向けに学びを提供する。特に社会変革を求める層に対しても教育プログラムをつくっていききたいと思っはいるんですが、小川さん、教育で社会変革に貢献できることはあるんでしょうか。

小川 晋平 (以下、小川) プログラムというのは社会での実践でもあるけど、実践の前でもあると考えたら、失敗できる場として使えたら有意義じゃないかと思



います。たとえば、本当にその事業、プロジェクトで失敗したら損失が出る、下手をしたら会社がなくなってしまう事態と考えると、失敗ができるというプログラムなら意味があるのかな、と。杉山 すごく良いお話、ありがとうございます。COC+のサブコーディネーターをしていた時に教育プログラムの視察でデンマークに行き、1回社会経験を積んだ人たちに実践的な学びを提供するスクールを視察しました。そこでは絶対に失敗するプログラムを学

ばせる。なぜ失敗したか、を学ぶ。失敗から学ぶことはたくさんあると思う。学生に失敗させるのも一つの学びのポイントかなと思いました。実際、柳ヶ瀬でもなにか失敗はあったのですか。

大前 何をもって失敗というか、難しいところもあるんですが、定期マーケットをやる前に単発のイベントをたくさんやっていて、イベントってすごい達成感があって盛り上がるのですが、持続する仕組みが伴わない。2回目は無理やりやっても3回目は断られる。そういうのがいくつかある。持続するやり方をつくろうというところにたどり着いた。

杉山 持続性ってすごい問題になるじゃないですか。持続性にとって何が一番のポイントなのでしょう。



大前 お金はやはり大事なポイントだったのですが、お金が回るからといっていい形で継続するわけではなくて、お金とマインドのバランスじゃないですかね。お金があっても続かないとか、マインドがあってもお金がないと続かない。お金とマインドの両立、バランスですかね。

杉山 小川さんに広島のを詳しく聞きたいのですが。続かなかったのはどういった点でしょう。

小川 続かなかった理由は明確で、自分事(じぶんごと)になる重要性ですね。広島の家具のメーカーさんが助成金を使い切るまでの期間はがんばる、ということで、自分事としてちゃんとやってなかった。助成金があっても、産業を振興したい、身銭を切ってもやっぱ、この街で生まれ育って働く、この街の子どもたちのことを本当に思っていたら、もっともっとちゃんとやったんでは、と思います。

杉山 柳ヶ瀬の活動では関わりを持ってやっている学生さんはいるんですか。

大前 学生の関わり方を模索していて、もうちょっと長期的に学生が関わる入口をつくって運営だけでない街の何かへの、関わり方を考えています。学校が中心市街地から離れてしまっていて、ぼくらも一緒に活動している岐阜大の先生が街の中に新しい場所をつくらうということをしています。

杉山 どうやって学生を街に出すのか。体験学習など外へ出すプログラムをた

くさんつくっていますが、学生のモチベーションをどうつくっていますか。

大前 専門領域でいろいろあるのでは。私が非常勤講師をしている建築系の学生なんかは、割とはっきりしていて、形になるものとか、アイデアを出したり、とか自分の学びの領域に直結するものは、割と積極的だったり、地域系とか手作り系の学生は、お店に直接コンタクトをとりについたりとか、より街の中に近いところに行くほど乗ってるとか。その子の目指しているものによって幅があって、なかなか一概にこうだよとは言にくいところがありますね。

杉山 青木さん、学生との繋がりは。

青木 杉山先生が学生を飲みにつれてくれて、ざっくばらんに話す機会をつくってくれるのをよく見かけています。飲み場とか食事をする場でざっくばらんな話もいらない話ができてる、こんな生き方をしている社会人がいるんだ、とか学生の時に知ったら、その学生にとっていいじゃないですか。



杉山 学生教育と社会の関わり方っていうのを、どういう教育プログラムを、これから社会に出る学生たちに対して大学はやるべきなのか。ぼくたちは、COC+で企業と学生が今年度も25個くらいプロジェクトをやっていて、来年度も4月から新しく25個くらいやろうとしています。今回は、学生と社会人を一緒に学ばせようと思います。今はどちらかというと、学生が社会に学びに出っていますが、今度は社会人と学生と一緒に学びをさせたいな、と思っています。こんな学びをしただけってものがありますか。

大前 社会に出てどんな仕事もそうなんですが、必要になってくるスキルというのは変わってくると思うのです。たとえば君は来月から海外に行ってくれと言われたら、まず語学が必要で、その街のことを勉強したりすることが必要で、学びというのは自分が表現する中で何が必要となってくるということでは。

小川 洋菓子のブランディングの仕事が多いのですが、商品開発から関わらせてもらっていて、パティシエさんと

の会話が非常に多い。お菓子の知識がいるんですよ。そう意味で洋菓子学校に行きたいとは思いますが、洋菓子の勉強はしたいです。

大前 あらゆることに手を出し始めていて、例えばお店のデザインとかを考えていくと、つくる人とコミュニケーションとったり、コンテンツのコアに迫ったりするとかするんじゃないですか。そうなったら自分でやったらいいんじゃないか、と。その道の専門、プロフェッショナルの領域だから手を出したらいけない、みたいな先入観もあったりするんですが、いやそうじゃない、とにかくやってみたらいいんじゃないか、と思ったりしたりします。

小川 杉山さんに返したいのですが、今、大前さんがおっしゃったように自分でやる、というけど、実際には資金も場所も、お金も時間も経験もいるわけですし、学生や若い社会人の方に、じゃやってみようか、と思う方もたくさんいるんですか。

杉山 ぼくらの頃に比べたら増えているのは間違いない。



今は先が読めないVUCA時代で、大企業に入ってもどうなるかわからないってこともあるので、割と学生たちに新しいことにチャレンジしやすいマインドセットは多い気がする。でもやっぱり、安定志向もいますし、いろいろいいと思う。本来、学びの場というのは、失敗しないように、そのために訓練したり、知識をつけたりする機関です。最初に言っていた失敗してもいいような状況をつくれるか、というのは教育のしがいがあると思いますね。最近、僕はいろんなところでティール組織ということ話をしている。従来の軍隊型ではなく、成功している組織体はみんなティールであって、学生たちも求めているのはティールとか家族的なものであって、軍隊的なところに入りたくない、という学生が増えている。学校の失敗しないところだけじゃない教育にもつながっていくと思う。この本、「ティール組織—マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現—」の組織モデルはこれだ。一番下がレッドで「オオカミの群れ 力による支配」、アンバー「軍隊 長期的展望 厳格な階級に基づくヒエラルキー」、オレンジ「機械

イノベーション、科学的マネジメント、社長と従業員のヒエラルキー」、この下の3つが、大前さんが言っていた学校というところは失敗できないもの、というのはこういう組織でうまくいく人材ということでしょう。でもVUCA時代の今は、こういう組織がうまくいっていない時代になっていて、に成功しているのは上の2つのグリーンとティールで、グリーンは「家族 多様性の尊重、ヒエラルキーは残すものの従業員の呼称をメンバー、キャストへ」、ティールは「生命体 信頼で結び付いている、指示命令系統はなくて良い」。今、たぶん成功しているのはティールに基づいた組織と言われています。



たぶんVUCA時代というのは、こういうフレキシビリティが必要なんだと思う。ぼくは今、3つのTで山梨県を捉え直したい。科学技術の利用と価値共創という「クリエイティブ資本論」ということで、リチャード・フロリダ先生が都市の創造性、発展する都市はどういう都市なのか、この3つのTがある都市。柳ヶ瀬がどうなのか、京都はどうなのか、寛容さがないという話もありましたが、3つのTとは

「Talent」の「T」 人材
「Technology」の「T」 技術
「Tolerance」の「T」 寛容性

実は「Talent」というのは、メーカーズムーブメントによって地方に面白い人が流れてきています。次は「Tolerance」、寛容さですが、共存にとって一番重要ということで多様性、LGBTに限らず多様性がある土地は大切です。最後の「Technology」ですが、大学に限らず、地方のテクノロジーは企業や各分野の専門家がたくさん持っているので大学が地方にとって特に重要とも思わないのですが、この3つのTを山梨や柳ヶ瀬、京都でどう実現するか。「Talent」については地方にいっぱい流れてきている。たまたま今日来ていただいた3人が2010年代に都心から地方に流れた。今、地方がフィールドとしてすごく面白い時代になっている。どうやって大学が社会と、面白い

社会人と、きょうの3人みたいな人とつながっていけばいいのか。

大前 いろんな属性の人が混ざり合うところがどんどん減ってきている。だからこそ、何かの変化とかが大事になってきている。人がフラットに出会える場が街の中にできればいいな、と思う。

杉山 いろんな人たちと会わせるというのは今回のプログラムのひとつのテーマです。もう一つは大学にいろんな社会人が講師じゃなくても来られることが大切なのかな。小川さんからみて学生たちがどうやって社会人と会えるのいいのでしょうか。

小川 パッケージにすると知りたいたいが、きれいに整ってしまうのでは。リアルを知るということが若い人や学生に重要ではないか。それにはゼミではなくて食事に行った時のほうが素が出る、とか。互いに本音で話せたり事実を語ったりすることができます。

杉山 これまで話してきたことで失敗する経験が大切、つくりこまないことも大切だということに共感しました。最後に、青木さんに、どのようなプログラムにしてどんなことを伝えたいと思いますか。

青木 特に山梨は中小企業が非常に多いこともあって、企業が何をしているのか、学生たちはまったくわからないで悩んでいます。企業側も人材が足りないと悩んでいます。実際に企業に行って体験できるプログラムがあったらいいな、と思います。

杉山 伝えるだけでなく、なにか学生と本音で語りあう場が必要だと思います。そういうことをしないと社会変革につながるような場にはつながらないと思います。これをご縁に、きょうの皆さんには、これからプログラムへのアドバイスをいただけたら、と思います。きょうはありがとうございました。



左から杉山歩、青木はるひ氏、小川晋平氏、大前貴裕氏

03

令和 3 年度活動実績報告

令和3年6月に、「観光高度化人材育成プログラム」「地域づくり加速化人材育成プログラム」の2プログラムを開講し、PENTASYAMANASHIの周知活動に力を入れるとともに、申込みシステムの構築、受講者管理、成績登録まで運用できるよう実務体制を整備した。以下のとおり、活動実績を報告いたします。

1. 広報活動

参加大学や事業協働機関の協力を得て対象地域に広くリーフレット等を配布し、本事業の周知を行った。また、授業の様子や講座の終了報告や成果報告をウェブサイトやFacebookで発信し受講生やコーディネーターがシェアしたことで、本事業の知名向上に貢献した。

(1) PENTAS Program、PENTAS MagazineVol.1の発行

「PENTAS YAMANASHI」が学生から社会人まで幅広い方に認知されるようリーフレットとマガジンの表紙はロゴマークで統一したデザインとした。



(2) チラシの作成

学生向け・社会人向けに、オリジナルのチラシを作成し配布した。



(3) ホームページデザインのリニューアル

幅広い世代から受け入れられるようホームページの内容を見直し、全体のデザインを一新した。令和4年度開講予定の新プログラム情報や科目紹介についても、戦略的に先行広報活動を進めた。



2. 履修管理システムの構築

受講の申込み、受講者管理、成績登録までの一連の業務支援ツールを構築した。運用を進めていく中で、受講者自身がプログラム修了証を目指すまでに必要な単位数が管理できるようマイページ機能を追加し、さらに成績確認や成績証明書の発行依頼もWeb上で対応できるようニーズに合わせて、システムを更新した。



<山梨県立大学> PENTAS YAMANASHI
受講の申込

次の方は「メールアドレスの登録」を再度行ってください。
・今年度の申込コードをお持ちでない方
・今年度の申込コードをお忘れになった方

申込コード (idname)

※各項目を入力して2分以内に登録してください。

メールアドレス: *****@yamanshi-kai.ac.jp

受講生コード: 2021CR0001

氏名 (漢字):

氏名 (カナ):

生年月日: 年 月 日

【受講者用 申込み画面】

コース別表示選択:

学年	科目	単位数	授業料	授業料
1	VUCA時代のキャリアレジリエンス ＜専門対面＞	2単位	授業料 (4/13～7/27)	28,800円

学年	科目	単位数	授業料	授業料
1	鬼塚のチャレンジ1 ＜専門対面＞	1単位	授業料 (10/7～11/25)	14,300円
1	鬼塚のチャレンジ2 ＜専門対面＞	1単位	授業料 (12/2～2/5)	14,300円
2	グローバルマインドとスキル ＜専門対面＞ (国際コミュニケーション)	2単位	授業料 (10/7～11/25)	28,600円
2	鬼塚のチャレンジ3 ＜専門対面＞	2単位	授業料 (5/28～7/2)	28,600円

3. ハイフレックス型講義施設の整備

飯田キャンパスC101教室及び池田キャンパスLL教室に他大生や社会人が遠隔から受講しやすいよう、ハイフレックス型授業対応の教室を整備した。



4. オンライン講義・オンデマンド配信の活用

令和3年度開講の「日本ワイン歴史マイスター養成講座」は、ハイフレックス型講義でオンラインと対面を同時配信し、欠席者にはオンデマンド配信を行った。「おもてなしマイスター養成講座」は、担当講師の高野登先生が遠隔からの講義を行い、受講者もフルオンラインでの受講となった。



5. 数値目標と実績

令和3年6月より、「観光高度化人材育成プログラム」「地域づくり加速化人材育成プログラム」の2つのプログラムを開講した。以下のとおり、受講者実績を報告いたします。

数値目標と実績

	令和2年度		令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度	
	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績	目標	実績
開講プログラム数	0	0	2	2	4		4		5	
学生総受講者	0	0	40	77	100		110		125	
うち最終年次受講者数	—	0	—	4	—		—		—	
地元就職者数	0	0	10	1	60		70		85	
地元定着者数	0	0	10		60		70		85	
社会人受講者数	0	0	40	117	70		100		110	
うち県外からの受講者数	0	0	5	39	10		15		20	
社員教育に利用する企業数	0	0	3	3	6		9		10	
学外の実務家教員の割合	—	—	20%	76%	22%		25%		25%	
教員数	—	0	—	17	—		—		—	
実務家教員数	—	0	—	13	—		—		—	

科目別受講者数

時期	科目分類	科目名	配当 年次	単位数	時間数	授業 形式	区分	選択/ 必修	担当	履修者数			
										合計	県大生	他大生	社会人
前期 通常	VUCA	地域のチャレンジ1	1～4年	1	16	講義	VUCA	選択	堀内久雄 杉山歩	24	17	4	3
	地域	情報発信の手法	3・4年	2	60	演習	技能	選択	兼清慎一	7	4	3	0
		コミュニケーション手法	3・4年	2	60	演習	技能	選択	田中友悟	7	5	1	1
前期 集中	VUCA	地域しごと概論(地域づくり)	1～4年	2	30	講義	VUCA	選択	佐藤文昭	14	14	0	0
	地域	提案書作成のためのスキル	1～4年	1	30	演習	VUCA	選択	佐藤文昭	17	14	3	0
		地域づくり人材育成演習1	3・4年	1	30	演習	実践	必修	佐藤文昭	8	4	3	1
通年	観光	地域資源の保全と活用	3・4年	2	30	講義	技能	必修	堀内久雄 杉山歩	14	14	0	0
前期合計										91	72	14	5
後期 通常	VUCA	地域のチャレンジ2	1～4年	1	16	講義	VUCA	選択	堀内久雄 杉山歩	19	13	1	5
		グローバルマインドとスキル	1～4年	2	30	講義	VUCA	選択	嶋津幸樹	17	13	2	2
		VUCA時代のキャリアレジリエンス	1～4年	2	30	講義	VUCA	必修	水上篤 堀内久雄 杉山歩	16	14	1	1
	観光・ 地域	地域課題解決	3・4年	2	30	講義	技能	選択	田中友悟	6	3	0	3
		地域課題創造的解決演習	3・4年	1	30	演習	実践	選択	佐藤文昭 佐野信也	4	2	1	1
	観光	日本ワイン歴史マイスター養成講座	3・4年	1	30	演習	実践	選択	仲田道弘 杉山歩	48	4	1	43
		おもてなしマイスター養成講座	3・4年	1	30	演習	実践	選択	高野登	16	15	0	1(55)
後期 集中	観光・地域	地域課題解決演習	3・4年	1	30	演習	実践	選択	田中友悟	6	1	1	4
後期 通常	観光	ネイチャーガイド演習1	1～4年	1	30	演習	実践	選択	吉田均	20	20	0	0
		ネイチャーガイド演習2	1～4年	1	30	演習	実践	選択	吉田均	15	15	0	0
	地域	地域づくり人材育成講座	3・4年	1	30	演習	実践	必修	佐藤文昭 保坂久	10	6	2	2
		地域づくり人材育成演習2	3・4年	1	30	演習	実践	必修	佐藤文昭 渡邊たま緒 廣瀬 友幸	9	7	2	0
後期合計										186 (55)	113	11	62 (55)
令和3年度 年間受講者数										277 (55)	185	25	67 (55)

6. プログラム実施科目一覧

教育課程表（令和3年度 観光高度化人材育成プログラム）

区分	科目	必/選	最低必修単位	授業形式	学年配当	単位数
VUCA科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	講義	1～4	2
	地域のチャレンジ1	選択		講義	1～4	1
	地域のチャレンジ2	選択		講義	1～4	1
	グローバルマインドとスキル	選択		講義	1～4	2
	地域しごと概論(民間企業)	選択		講義	1～4	2
	提案書作成のためのスキル	選択		演習	1～4	1
大学科目	山梨学Ⅰ	選択	8単位 (学生のみ)	講義	1～4	2
	山梨学Ⅱ	選択		講義	1～4	2
	山梨の観光	選択		講義	1	2
	文化とコミュニケーション	選択		講義	1	2
	日本の歴史	選択		講義	1	2
	観光実務	選択		講義	1	2
	山梨観光演習	選択		演習	1	1
	海外インターンシップ	選択		実習	2	1
	観光ビジネス論	選択		講義	3	2
技能科目	地域資源の保全と活用	必修	3単位	講義	3・4	2
	自然文化からの価値創造1(料理とワインのマリアージュ)	選択		講義	3・4	1
	自然文化からの価値創造1(アドベンチャー・ツーリズム概論)	選択		講義	3・4	1
	地域課題解決	選択		講義	3・4	2
実践科目	地域課題解決演習	選択	4単位	演習	3・4	1
	地域課題創造的解決演習	選択		演習	3・4	1
	通訳入門実践	選択		演習	1～4	1
	実用中国語	選択		演習	1～4	1
	ネイチャーガイド演習1	選択		演習	1～4	1
	ネイチャーガイド演習2	選択		演習	3・4	1
	日本ワイン歴史マイスター養成講座	選択		演習	3・4	1
	おもてなしマイスター養成講座	選択		演習	3・4	1
	地域ブランドマネージャー養成講座	選択		演習	3・4	1

教育課程表（令和3年度 地域づくり加速化人材育成プログラム）

区分	科目	必/選	最低必修単位	授業形式	学年配当	単位数
VUCA科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	講義	1～4	2
	地域のチャレンジ1	選択		講義	1～4	1
	地域のチャレンジ2	選択		講義	1～4	1
	グローバルマインドとスキル	選択		講義	1～4	2
	地域しごと概論(地域づくり)	選択		講義	1～4	2
	提案書作成のためのスキル	選択		演習	1～4	1
大学科目	地域プロジェクト論	選択	8単位 (学生のみ)	講義	1	2
	環境社会学	選択		講義	3	2
	公共人材論	選択		講義	2	2
	山梨の政策課題	選択		講義	3	2
	政策法務論	選択		講義	3	2
	地域企業実践論	選択		講義	3	2
技能科目	コミュニケーション手法	選択	3単位	講義	3・4	2
	情報発信の手法	選択		演習	3・4	2
	地域課題解決	選択		講義	3・4	2
実践科目	地域課題解決演習	選択	4単位	演習	3・4	1
	地域課題創造的解決演習	選択		演習	3・4	1
	地域づくり人材育成講座	必修		演習	3・4	1
	地域づくり人材育成演習1	必修		演習	3・4	1
	地域づくり人材育成演習2	選択		演習	3・4	1

7. 授業実施報告（VUCA科目）

VUCA時代のキャリアレジリエンス

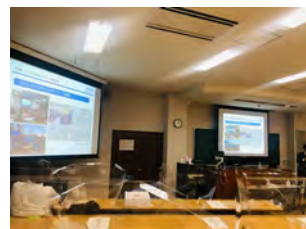
担当講師：水上篤、堀内久雄、杉山歩

【科目の目的】

現代は先の見えない時代(VUCA時代：Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性））と呼ばれるようになりました。VUCA時代においては、自らのキャリアを形成していくに際して、様々な困難に直面していくことが予想されます。困難に直面した時に、しなやかに対応していく能力が求められます。本授業では、社会の変化にしなやかに対応していくためのマインドのあり方、手法について学ぶことを目的とします。

【授業内容】

- 第1回（9/29）VUCA時代とは～hototoの人づくり～
水上 篤：山梨県立大学 特任教授
農業生産法人株式会社hototo代表取締役社長
- 第2回（10/6）空き家の有効活用
小林 はるひ 氏：Atago HOUSE代表
- 第3回（10/13）地域循環を促す仕組みづくり
大木 貴之 氏：ローカルスタンダード株式会社 代表取締役社長
- 第4回（10/20）ツーリズムの可能性～ウィンツーリズムの展開～
大木 貴之 氏：ローカルスタンダード株式会社 代表取締役社長
- 第5回（10/27）四国水族館の立ち上げ
流石 学 氏：株式会社四国水族館開発 代表取締役社長
- 第6回（11/10）地域おこしとブランディング
流石 学 氏：株式会社四国水族館開発 代表取締役社長
- 第7回（11/17）柳ヶ瀬を楽しむ町にする1
大前 貴裕 氏：株式会社ミユキデザイン 取締役
- 第8回（11/24）柳ヶ瀬を楽しむ町にする2
大前 貴裕 氏：株式会社ミユキデザイン 取締役
- 第9回（12/1）VUCA時代とキャリアデザイン
杉山 歩：山梨県立大学国際政策学部 准教授
- 第10回（12/8）VUCA時代とキャリア1
五月女 圭一 氏：株式会社ゲイト 代表取締役社長
- 第11回（12/15）VUCA時代とキャリア2
椎名 雄一 氏：精華学園高等学校 町田校 校長
- 第12回（12/22）VUCA時代とキャリア3
石橋 利真 氏：株式会社kaizen platform
- 第13回（1/5）VUCA時代とキャリア4 水上篤：山梨県立大学 特任教授
- 第14回（1/12）VUCA時代とキャリア5 水上篤：山梨県立大学 特任教授
- 第15回（1/19）VUCA時代とキャリア6
坪内 知佳 氏：株式会社GHIBLI
- 第16回（1/26）VUCA時代とキャリア7
平岩 亨 氏：平岩写真事務所



講義を振り返って

現代は先の見えない時代(VUCA時代：Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性））をいかに学生にわかってもらえるか、ゲスト講師を呼んでいろいろ事例を含めて説明しました。全講義を通して自らのキャリアを形成していくに際して、様々な困難に直面していくという前提で、どのように考え、どのように行動をとっていくか学生も知識として学んだと思います。コロナ禍なので実際のワークショップなどを行うことはできませんでしたが、教室内で問いをたてて考えてもらったり、講義を聞いて考えることを中心に後半の授業は進めました。能動的にそして、行動したい気持ちになった生徒さんは、実際講義に来てくれた講師の方の会社に行ったり現地をみに行ったりとアクティブに動く学生がでたことはよかったと思っています。その中で、学生の自分はこう考えて行動してみようというプランなどを出してくる学生をみると、全授業の講義が確実に学生に刺激を与え、深い学びを与えたのだと思うと、今後もますます力を入れて授業をしていきたいと考えています。

講義を通して見えた変化や効果



実際行動する学生が出たのはよかったと思っている。知識だけでなく、実際動くことで、自分の感覚と体験を取り込んで行きながら学ぼうとしている姿は今回の授業を通しての成果と見える。

地域のチャレンジ1

担当講師：堀内久雄、杉山歩

【科目の目的】

地域で様々な活動にチャレンジしている方をお招きし、活動のビジョン・考え方・思い・コンセプトなどについて語ってもらいます。地域の活動は様々な立場、どんな立場から行うことができます。本科目を通してチャレンジすることの意味について自ら考えてもらうことを目的とします。

【授業内容】

- 第1回（6/9）富士吉田のまちづくり
渡辺 一史：富士吉田市役所企画部本部次長
- 第2回（6/16）ハヶ岳の観光地域づくり
小林 昭治：DMOハヶ岳ツーリズムマネジメント代表
- 第3回（6/23）小菅村のむらづくり
船木 直美：小菅村長
- 第4回（6/30）小さな村のむらづくり
小村 幸司：NPO法人小さな村総合研究所代表理事
- 第5回（7/7）かえる舎の取り組み
斎藤 和真：特定非営利活動法人かえる舎代表
- 第6回（7/14）アメリカヤ
千葉 健司：株式会社イロハクラフト 代表取締役社長
- 第7回（7/21）富士山アウトドアミュージアム
舟津 宏昭：富士山アウトドアミュージアム代表
- 第8回（7/28）かつぬま朝市
高安 一：かつぬま朝市会長



講義を振り返って

本講座は、県内各地の「地域づくり」の実践者を講師に招いて実施した。

講師としては、人口700人の山村の首長、まちづくりがライフワークの公務員、全国的に有名な観光まちづくり組織の仕掛人、地域の記憶を復活させた建築家、地域おこし協力隊員、NPO代表など実に多彩な講師陣となった。それぞれの講師の地域にかける思いや、生み出されるアイデア、周囲を巻き込んだ実践、停滞、そして実現した時の感動、併せて地域が変わっていく、住もう人が「この町はいいな。」と感じるようになる事例が続いた。

様々な困難にチャレンジする際、支えてくれたのは、まさに「よそ者、馬鹿者、若者」と言われる多彩なメンバーたちである。いくつかの活性化する地域において、個性的な地域おこし協力隊員や連携協定を締結している大学生の存在を確認した。

また、まちづくりへのチャレンジにおいて、「地域の共感」をいかに得るか。そして「持続可能」な仕組みを創り上げてことが重要かを認識した。

講義を通して見えた変化や効果

各講座とも、20分から30分程度の質問時間を確保したが時間内に収まらず、講義終了後も講師を囲んでの意見交換が続いていた。

後日、複数の講師から、講師のフィールドへ学生が訪問しての意見交換が行われたと報告を受けた。着実に現地、現場へと学生たちの関心が向かっているのを感じた。

その際、「これまでこんな熱心な学生たちに会ったことがない。」と感激の言葉が寄せられた。次年度もぜひこの熱い講座を継続したい。

地域のチャレンジ2

担当講師：堀内久雄、杉山歩

【科目の目的】

地域でビジネスの側面から様々な活動にチャレンジしている方をお招きし、活動のビジョン・考え方・思い・コンセプトなどについて語ってもらいます。

本科目を通して地域にありながらグローバルにチャレンジすることの意味について自ら考えてもらうことを目的とします。

【授業内容】

第1回（12/1）日本酒

天野 怜 氏：笹一酒造株式会社 代表取締役

第2回（12/8）ジュエリー

望月 直樹 氏：株式会社ラッキー商会 代表取締役

第3回（12/15）印伝

上原 伊三男氏：株式会社印傳屋上原勇七 専務取締役

第4回（12/22）織物

五十嵐 哲也 氏：山梨県産業技術センター 主幹研究員

第5回（1/5）evam eva

近藤 和也 氏・尚子 氏：近藤ニット株式会社

第6回（1/12）果物・スイーツ

古屋 浩 氏：株式会社プロヴィンチア代表取締役

第7回（1/19）地域食材

豊島 雅也 氏：レストラン「トヨシマ」オーナーシェフ

第8回（1/26）ワイン

三澤 彩奈 氏：中央葡萄酒株式会社 栽培醸造責任者



講義を振り返って

地場産業をはじめとする地域の産業で、先進的な試みにより高い評価を受け、輝いている企業経営者を中心に講師をお願いした。いずれの企業も、地域にとどまらず、世界に向けたブランドとして県内経済をけん引している企業でもある。

講師の言葉で印象に残っているものとして、

- ・ 伝統的な老舗企業も、常にチャレンジし続けて今がある。変化、進化し続けないと伝統は守れない。
- ・ ブランド価値を守るため、ロングライフデザインを求め続ける。商品の在庫は持たない。バーゲンはない。
- ・ 従来型の活字媒体、電波媒体はすでに広告効果が限界を迎えている。
顧客ニーズを把握するためにSNS上の情報を分析し、新商品開発を行っている。
- ・ 理想のものづくりにこだわる。ワインの出来の80%は原料の葡萄で決まる。
そのために妥協しない葡萄づくりに努める。
- ・ 誰と出会うか。人生の転機となる人との出会いが大切。そのためには前に進み続けること。
理想を求め続けることが大切。

これらの言葉が、受講者の心にも深く刻まれたものと思う。

講義を通して見えた変化や効果

受講者にとって、これまでよく知らなかった、多様で特色ある県内企業の実態や様々な取り組みについて理解することができ、身近な企業として再認識する機会となった。

また、会社（ブランド）維持のための様々なチャレンジを行っていること。その重要性についても知ることができた。各講師の自社企業における不断のチャレンジについては、受講者のマインドを変化させ、心を打つものがあった。

グローバルマインドとスキル

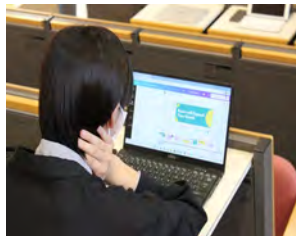
担当講師：杉山歩（嶋津幸樹／タクトピア株式会社 委託）

【科目の目的】

「山梨から世界を変える地方創生プロジェクト」のアイデアをチームで創造し、発信することを目的としています。アイデア創造は自己分析・自己探究を通して自分の人生ストーリーや地元山梨への想いを言語化することから始まります。次いで地方創生人材として必須となる基本的な検討プロセスと必要なマインド/スキルの習得をおこない、最終的にローカルとグローバルの両軸で課題解決策を模索していきます。同時に英語「を」学ぶのではなく英語「で」自分のことと世界のことを探究するプロジェクト型学習の形態をとります。最終発表ではグローバルな自分と世界にインパクトを与えるプロジェクトを英語で発表します。

【授業内容】

- 第1回（10/2）Goal Setting 目標設定（オンデマンド視聴）90 min
時代の流れを理解し、自分なりに解釈して、ローカル（自分のこと・地元のこと）とグローバル（他人のこと・社会のこと）に対する問題意識を持ち、この講座における目標設定をします。
- 第2回（10/9）Local and Self Analysis 自己分析 360 min
自己紹介アクティビティを通して自分の好き・嫌い、強み・弱みを分析と発表を行い、山梨での原体験を言語化し、多角的に見た自分の人生ストーリーを英語で発表します。
- 第3回（10/16）Intercultural Understanding 異文化理解 360 min
日本と世界の比較・分析を通して地元・海外の魅力を発見し、世の中の多様性を理解した上で共感ベースで仲間を作り、チームビルディングを行います。
- 第4回（10/23）Innovation and Creation 革新と創造 360 min
世の中の発明・革新の意義を理解した上で、チームでアイデア発想を行い、独創的な課題解決に必要なプロトタイプを制作し、魅力的に表現する技法を身につけます。
- 第5回（10/30）Final Presentation 最終発表 180 min
チームと協力して課題解決アイデア・事業アイデアを英語で発表します。



講義を振り返って

「山梨から世界を変える地方創生プロジェクト」という壮大なミッションに想いを寄せる参加者と心的安全性の高い環境で議論・意見形成ができたこと、そして徹底した自己分析を通して多様性を受け入れながらも自己の確立ができたことが最も大きな収穫であった。使用言語に関しても自分にとって心地の良い言語で発言するというポリシーの元、誰もが英語で挑戦してみようとする姿勢が見られ、また互いにポジティブ・ネガティブフィードバックを行うループが確立されていたため、常に高め合う関係性を保つことができ、自己理解に留まらず多様な他者を受け入れ協働するマインドにも感銘を受けた。授業外でのSlackを用いたコミュニケーションも活発でプロジェクト終了後も交流が続いている。

時代の変化に合わせて自分が適応していくことや磨いていくべきスキルの認識やマインドは培われたが、そのスキルを中長期的に磨いていく機会やモチベーション維持のための環境が提供されていない点が唯一の懸念点でありよう改善ポイントである。より継続的に自己実現に向けてサポートできるコミュニティや環境を提供できると参加者のプロジェクトの実現可能性が高まるのではと感じている。

講義を通して見えた変化や効果

山梨という環境で参加者自身がどのように地域貢献できるのかを真剣に考える機会となり、これまで漠然と取り組んできた勉強や仕事に対する姿勢の変化に繋がった。全参加者との密なコミュニケーションとメンタリングを通して互いにフィードバックする関係性が生まれた。とりあえず手を挙げて発言・行動してみるという挑戦思考も培われ、最後の振り返りでも「もっと学びたい・挑戦したい」という声が顕著であった。



「グローバルマインドとスキル」 受講者アンケート

【成長・学びに役立ったこと】



参加者との交流です。積極的に人と関わっていくという態度や、自分がやりたいことを常に頭に置き、アイデアのヒントを拾っていくこと、自分がやりたいことをしっかりと言語化できることなど、参加者の方々と交流する上で刺激を受けられました。



当たり前を問い続けることの大切さを知った。何事も興味を持たなければ、新しい道や刺激は開けない事を体験として学べた事はとても良かったです。



短絡的に「良さそう」な意見を出し合っていく議論の中、リベラルな雰囲気強い中で、流される事なくメタ的な視点から意見やアイデアを出すことにより、チームワークをより深めて新しい視座に漕ぎ着けた経験をし、有意義だと感じた。



大学生活において、自身の夢や目標、成し遂げたいこと等を公言したり、発表し合うことはなかなかない機会である。今回のグローバルマインドとスキルの講義では、向上心と好奇心旺盛な若者たちが集結して、グループワークやプレゼンテーションなどを通して協調性や自己表現の機会がたくさんあり非常に貴重な時間だったと感じている。

【研修に参加する前と参加した後の変化】



具体的に変わったことは日記をつけるようになったことです。ある参加者から影響を受けたことと、講義内でもあったように、振り返りは大事だと実感したので続けています。あとは、もっと自分からアプローチしていいんだ、積極的に人と関わっていいんだということがわかり、意識が変わりました。



講義中、あんなに発言しやすい雰囲気づくりをしてくださったのに、思っていることを素直に言葉にして伝えられなかったことが、今回の反省点です。心の中では、考えや体験談がスタンバイしていたのに。自分で勝手にジャッジして黙り込むのはもうやめです。「hesitateからの脱却」を今後のテーマに掲げることにしました。



物事の考え方として、何事も白黒の二極で考えなくなりました。また、失敗をあまり恐れなくなりました。行動の仕方として、緊張したときにどう自分を持っていくかを少し知れた気がしています。



会を重ねるにつれて、メンバー全体の士気はもちろんのこと、心理的安全性が担保されていき、議論が活発かつどんなことでも話したい時に話すべきことを投げれるようになった。ファシリテーターでもあり、講師でもある嶋津さんの存在は大きかったように思う。

【今後の活動目標】



自分を信じて、興味があることにチャレンジしてみようと思いました。また、自分の考えを人に効果的に伝える方法をもっと学んでいきたいです。山梨になにか還元できるような活動をしたいです。



フックとなる教材が多かったように思うので、ここから個々の事例に対して反駁意見を検討したり、全体の議論の流れをどのように設計すべきだったか、またそれによりどう変化していたのかを振り返るタイミングを作り、今後の議論設計に活かしたい。



語学はもちろん、もっと沢山の本を飲みたいと思った。地域と密着したプロジェクトを進めたりしたい。

【タクトピアスタッフへのメッセージ】



高校生の時に受講できたら、今、私はどこで何をしていたかな、、、。きっと心を揺さぶられて、日本を飛び出していたのではないかと思います。毎週、いかに自分の頭が凝り固まっているかを痛感し、ハッとさせられるプログラムでした。また、山梨はすきだけど、居心地が悪いなど強く感じていた過去を思い出しました。（コロナ禍ですっと籠もって、最近麻痺してきていたことにも今回気が付きました。）視野が狭まらないように、定期的に環境を変えたり、色々な人がいる場に飛び込んだりしていこうと改めて決意しました。自分や誰かの夢・目標を言葉にしてもよいのだと思えたことも、私にとって大きな収穫です。みなさんが、他者に対して否定的でなく寛容で、居心地が良かったです。この度は参加させていただき、ありがとうございました！



とても素敵な1ヶ月でした。地元山梨でグローバルを考える機会が出来ていることを体感して、とても嬉しく思いました。



1ヶ月間ありがとうございました！自分がどのような人間なのか、少しわかってきた気がします。様々なバックグラウンドを持った学生さん達や社会人の方々と出会えたのもこの授業のおかげです。授業が終わってしまって寂しいです。本当に楽しい時間でした！

地域しごと概論（地域づくり）

担当講師：佐藤 文昭、NPO TANEBI（タネビ）

【科目の目的】

「VUCA」と呼ばれる先行き不透明な時代。そんな中で地域課題の解決には、これまでと異なる問題の捉え方やアプローチが求められています。本講座では、地域で暮らし働く様々なゲストスピーカーの視点から今日の社会を捉え、仕事を通じてそれと向き合う想いを綴る「ストーリー」を受講者と共有します。
6名のゲストスピーカーとの対話を通じて、受講者ひとり一人にとって自らのキャリアを考えていく上での大切なこと＝「タネビ（種火）」を探ります。

【授業内容】

第1回（6/4）オリエンテーション：「ストーリー」とは？

第2回（6/11）ストーリーへの導入（ワークショップ）

第3回（6/11）ストーリーへの導入：花宮香織さん

（学生時代に表現活動に参加したことをきっかけにNPO法人コモンビートに参加し、現在、事務局長として多様な価値観を認め合える社会づくりに取り組む。）

第4回（6/18）ストーリーその1：イセダマミコさん

（漫画家→大工！？今は2週目。人生100年時代の生き方を目指す。）

第5回（6/18）ディスカッション

第6回（6/25）ストーリーその2：小野明日香さん

（日本で唯一性転換手術をした電気主任技術者として電気設備の保安会社を経営する。）

第7回（6/25）ディスカッション

第8回（7/2）ストーリーその3：芦沢郁哉さん

（教員養成系大学で学ぶも教師にはならず、NPO法人bond placeで、親や教師とは異なるナナメの関係から生活困窮層の子どもたちの学習支援などを行う。）

第9回（7/2）ディスカッション

第10回（7/9）ストーリーその4：赤池侑馬さん

（兄がバイク事故で障害者になったことをきっかけに、学校教員をやめてKEIPE株式会社を設立し、障害者雇用促進事業に取り組む。）

第11回（7/9）ディスカッション

第12回（7/16）ストーリーその5：宮下成平さん

（高校・大学で建築を専攻するも、富士吉田市に戻り家業のまちに愛されるパン屋を継ぐ。）

第13回（7/16）ディスカッション

第14回（7/30）発表：わたしの「タネビ」

第15回（7/30）ディスカッション・振り返り



講義を振り返って

NPOの皆さんのご協力により、様々な社会人をお招きして、学生や社会人の多様な視点から仕事について考える場を設けてきた。特に、各回学生同士また学生とゲストの対話を重視したことから、話を聞くだけではなく学生自身が自分の考えを話すことを通じて、働くこととは何かについて考えていくことができたと感じている。

また、ゲストの話を通じて、他者と違うことを恐れずにそれを主張することの大切さや、考え方や価値観の違いをお互いに認め合うという姿勢についても伝えることが出来たと考えている。

さらに、ゲストの話を聞くというインプットと、それに対する自分自身の考えを話す時間を設けていくことで、学生ひとり一人の意識の変化を促していくことが可能であるととともに、授業の中で何を話しても大丈夫という心理的安心感を担保していくことも場づくりとして大切な要素の一つであると考えている。

講義を通して見えた変化や効果

当初の学生の仕事に対する考え方は、必ずしも良いものではなかったが、15回の講義を通じて、学生ひとり一人に新たな仕事観というものが芽生えはじめたと実感している。特に、何人かの学生は、授業後に自らゲスト講師に連絡を取り後日職場を訪ねるなどの主体的な行動につながったことは、とても大きな成果であると考えている。

【地域しごと概論（地域づくり）受講者アンケート】



地域しごと概論という授業を通して心理的に大きな影響を受けたと思う。自分の思いを大事にすること、自信をつけるために努力をすること、自分の思いを他者に伝えること…。そしてその影響が今後自分の人生の中でどう活かってくるのか、自分でも非常に楽しみである。



ゲストスピーカーさんの皆さんのように自分の仕事に誇りを持つことは誰にでもできることではないと思う。自分の仕事をそんな風に思えたら人生は更に豊かになるだろう。「仕事」を「志事」に。これからの就職活動で今回の講義で得たことを胸に、「志事」を見つけていきたい。



この授業を終え、私の考える仕事は、人生の一部で、生活の一部であること。仕事という枠で捉えていないこと。また、それぞれの人生観や価値観が仕事に反映されていることだ。私はまだ自分が将来就きたい仕事は見つかっていないが、仕事観は見つけることが出来た。私の考える理想の仕事の形は、ただお金を稼ぐためにあるのではなく、自分がこれをしたという強い意志があって、その意志が誰かのためになってそれに収入がついてくるという形である。今回、地域しごと概論を履修して本当に良かった。10年後皆さんとまた集まって、話したい。

提案書作成のためのスキル

担当講師：佐藤 文昭

【科目の目的】

事業提案、補助金申請、就職活動のエントリーシート。今日、わたしたちは様々な場面で、自らの考えを相手に伝えることで、新たな事業や資金、仕事を得る機会がますます増えています。その際に求められるのは、漠然と自らの主張を述べるだけではなく、社会に対する自らの「問い」を立て。架空の「事業プロポーザル」をテーマに、発注者のなすべき「仕事」をどのように捉え、自らが何を感じ、提案をどのように形にしていくかを、実践的に学びます。

【授業内容】

- 第1回 (9/18) オリエンテーション・提案書とは？
- 第2回 (9/18) 背景を理解する
- 第3回 (9/18) 発注者のなすべき「仕事」を理解する
- 第4回 (9/18) 感性を生かす（アイデア、メタファー、ストーリーなど）
- 第5回 (9/25) 論理的に組み立てる（フロー、ダイアグラム、スキームなど）
- 第6回 (9/25) 提案書の作成（その1）
- 第7回 (9/25) 提案書の作成（その2）
- 第8回 (9/25) 発表・振り返り



講義を振り返って

2日間で地域の課題からその解決に向けた事業計画をつくるという内容であった。提案書作成を中心とした内容ではあるが、実際には「どのように」書くかというよりも、「何を」書くか「なぜ」書くのかといった提案の背景に多くの時間をかけた。

提案書を書くということは、課題を解決したい、事業を実現したいという強いエネルギーによって動機づけられるものであるが、「授業」という枠組みの中で学生ひとり一人がどこまで強い問題意識を持っていたかという点については個人差があったように感じた。

また、集中講義と言う環境の中では、各回の内容を自分なりに咀嚼する時間が十分に取れなかったことは、大きな反省点のひとつである。

講義を通して見えた変化や効果



各自の問題意識に基づいて、その解決策を検討し、事業という形にまとめることができた。の中で、アイデアスケッチを用いた事業の発表などを行ったが、それにより学生ひとり一人が目指す事業の姿を具体的にイメージすることが出来たと考えている。

8. 授業実施報告（観光高度化人材育成プログラム）

地域資源の保全と活用

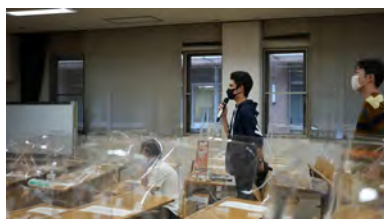
担当講師：堀内久雄、杉山歩

【科目の目的】

観光資源には文化と自然があります。山梨県には富士山ユネスコ世界文化遺産、南アルプスユネスコエコパークと甲武信ユネスコエコパークがあります。持続的な観光開発には自然環境、文化資源を保全しながら開発を進めていく必要があります。本科目では自然や文化の保全と観光をどのようにバランスさせていくかについて理解してもらうことを目的とします。

【授業内容】

- 第1回（6/9） 世界文化遺産富士山
森原 明廣 氏：山梨県立博物館学芸課長
- 第2回（6/16） 美術館と観光
向山 富士雄 氏：南アルプス市立美術館長
- 第3回（6/23） ユネスコエコパークの地域資源
興水 達司 氏：山梨県立大学特任教授
- 第4回（6/30） 山梨の縄文
長澤 宏昌 氏：鶴岡山遠妙寺住職
- 第5回（7/7） 歴史文化と観光
守屋 正彦 氏：山梨県立博物館長
- 第6回（7/14） 富士講・山岳信仰
堀内 眞 氏：山梨県立富士山世界遺産センター学芸員
- 第7回（7/21） 甲府城
宮里 学 氏：山梨県埋蔵文化財センター学芸員
- 第8回（7/28） 土偶の世界
小野 正文 氏：歴史博物館信玄公宝物館長
- 第9回（9/29） 富士急ハイランド
羽田 亮太 氏：株式会社富士急ハイランド 総務部長
- 第10回（10/6） 星のや富士
松野 将至 氏：星のや富士 総支配人
- 第11回（10/13） NIPPONIA小菅村源流の村
谷口 峻哉 氏：NIPPONIA小菅源流の村 番頭
- 第12回（10/20） 観光施設
金丸 滋 氏：株式会社アルプス 代表取締役社長
- 第13回（10/27） 店舗・土産品開発
竜沢 恒 氏：中央物産株式会社 代表取締役
- 第14回（11/10） 富士山
井上 義景 氏：富士山旅館組合 若手グループ代表
- 第15回（11/17） 自然体験ガイド
太田 安彦 氏：一社マウントフジトレイルクラブ 代表理事
- 第16回（11/24） アクティビティ
田村 孝次 氏：カントリーレイクシステムズ 代表



講義を振り返って

地域の歴史、文化などの貴重な資源を保全していくことの重要性は誰もが認めている。しかしながら、保全しつつさらに多様な地域資源を高度に活用しようとする試みが県内の各地域で行われている。

本講義は、かけがえのない地域資源を発見し、磨き上げ、誘客のコンテンツとして情報発信し、地域活性化へと繋げている多様な実践者に講師をお願いした。講義を通じて、本県に存在する、世界文化遺産富士山、南アルプスなど恵まれた自然資源、縄文や武田の歴史など誇るべき歴史資源、ジビエ、フルーツなどの豊かな地域食材の存在を知ることができた。

また、その活用にあたっては、様々な困難な課題を解決し、新たな発想から活用がなされていること、先駆的で多くの人々を魅了する活用の事例についても学ぶことができた。

残念ながら、現地での研修は叶わなかったが、次年度は実現することで、学びをさらに深いものにしたい。

講義を通して見た変化や効果

各専門ジャンルにおける実務家講師陣の高い専門性、リアルな実践の話題、関わる仕事に対する思いの深さに受講者が共感し、興味深い講座が続いた。各講義において、県内の多様で魅力的な資源について改めて認知できた。また、活用事例に対しての受講者の関心も高く、講義内容について多くの質問が寄せられ、一般的な大学生の「受け身」と言われる受講態度とは異なり、深い関係性を求め、積極的に参加しようとする授業態度が続いた。その姿勢は、各講師からも高く評価していただいた。

ネイチャーガイド演習1

担当講師：吉田 均

【科目の目的】

山梨県には、世界文化遺産やユネスコエコパークなど、自然の美しさはもちろん、多様な歴史や文化を色濃く残す山岳地域が広がっています。本科目は、ネイチャーガイドをキーワードに、山岳信仰などの地域の歴史や文化なども紹介しながら、季節に合った多様な視点で、その現代的な意義や概要を学びます。また実際に県内で実施されているネイチャーツアーに顧客として参加し、体験的な学習を行います。

【授業内容】

第1回（12/5）オリエンテーション/ネイチャーガイドとは（概論）

第2回（12/5）ネイチャーガイドの活動内容

第3回（12/5）甲武信ユネスコエコパークでの民間企業の役割（GATESを事例として）。

第4回（12/11）ユネスコエコパークとは（概論）。

第5回（12/11）同地域の古道の現状。

第6回（12/11）フィールドワークに向けた準備と役割分担。

第7回・第8回・第9回・第10回・第11回（12/12）甲武信ユネスコエコパーク内で要害山と深草観音縦走 実践演習

ネイチャーガイドの活動内容やユネスコパークについて学習し、実際に甲武信ユネスコエコパーク内の要害山と深草観音でガイドツアーを体験しました。ネイチャーガイドをキーワードに、山岳信仰などの地域の歴史や文化について、季節に合った多様な視点から、その現代的な意義や概要を体験的に学びました。



講義を振り返って

甲武信ユネスコエコパークを体験的に理解するため、要害山と深草観音での山岳ガイドをベースとしたネイチャーガイドを、地元のアウトドアツアーを専門とするGATESと連携協力して試作しました。学生には、トレッキングチーム維持のためのフロント、バック、危機管理、タイムキーパー、記録などの役割を全員で分担して実施したため、緊張感を持って参加していただくことができました。また歴史文化財や山岳信仰の聖地が、その地質や植生などの自然環境とも密接に関係することを学び、大変好評でした。

講義を通して見えた変化や効果

同ツアーは大変好評であったため、翌2022年6月には、甲府市歴史文化財課との共催で、市民向け事業としても実施されることとなりました。同講義の履修者も、ガイドとして参加します。現在甲府市と企画立案中です。6月の甲府市広報で20名を市民対象で募集し、6月26日に実施予定です。

【ネイチャーガイド演習1 受講者アンケート】



県庁所在地の主要駅からバスで30分で、このような登山コースがあったことにかなり驚いた。



動物の存在を教えてくれる痕跡がいくつも見つかる。食べた跡のある松ぼっくりやキノコ、沢山落ちているはずのどんぐりが中々見つからないなど。



要害山も深草観音も行く価値のある場所だと思った。自然も歴史もその場で楽しめる場所は、中々ないと思う。心が浄化され深いため息の出る場所だった。

ネイチャーガイド演習2

担当講師：吉田 均

【科目の目的】

山梨県には、世界文化遺産やユネスコエコパークなど、自然の美しさはもちろん、多様な歴史や文化を色濃く残す山岳地域が広がっています。本科目は、ネイチャーガイドをキーワードに、山岳信仰などの地域の歴史や文化、また日本国内での事例研究なども紹介しながら、季節に合った多様な視点でのツアーの意義や概要を学びます。あわせて実際に「甲武信ユネスコエコパーク」内でのネイチャーツアーの企画立案を補佐し、当日はガイド研修に参加することで、その企画や実施方法を体験的に学びます。

【授業内容】

第1回（12/25）オリエンテーション/御嶽昇仙峡の自然環境と歴史。

第2回（12/25）同地域にける「日本遺産」の構成文化財。

第3回（12/25）ガイドの心得。

第4回（12/25）危機管理とフィールドワークの説明。

第5回、第6回、第7回、第8回（12/26）

甲武信ユネスコエコパーク内で、御嶽新道（天神森～県営駐車場～仙娥滝上）実践演習

第9回、第10回、第11回、第12回（1/8）

甲武信ユネスコエコパーク内で、日本遺産御嶽昇仙峡周辺の構成文化財ツアー（板溪溪谷～金桜神社等）実践演習

御嶽昇仙峡の自然環境と歴史や、日本遺産の構成文化財について学習し、2日間に分けてガイドツアーを体験しました。第1日目は、日本遺産である御嶽昇仙峡周辺の構成文化財ツアーで、金桜神社から板敷溪谷、常設寺を経由し平瀬浄水場までたどる充実した内容となり、第2日目は、昇仙峡レジェンドガイドと共に天鼓林から甲府市グリーンラインへ。その後は昇仙峡ロープウェイで移動しながら、徒歩で弥三郎岳山頂へ向かいました。また、その後は昇仙峡観光協会 芦澤卓夫会長へインタビューを行う機会も頂きました。



講義を振り返って

甲武信ユネスコエコパークと日本遺産を体験的に理解するため、昇仙峡日本遺産ガイドをベースとしたネイチャーガイドを、甲府市と昇仙峡観光協会と連携協力して試作しました。学生には、トレッキングチーム維持のためのフロント、バック、危機管理、タイムキーパー、記録などの役割を全員で分担して実施したため、緊張感を持って参加していただくことができました。通常は人が歩くことがない昇仙峡山頂部を貫く、1000年続く絶景を実際に触れていただき大変好評でした。

講義を通して見えた変化や効果

本来同ツアーは、日本遺産昇仙峡の古道をトレッキングする際のアシスタントガイド制度のモデルを立案のため、甲府市と甲斐市との連携で企画されました。実際に同講義の全過程を視察していただいた結果、全講義履修者13名を昇仙峡地域活性化推進協議会の樋口雄一会長（現甲府市長）名で、「日本遺産昇仙峡アシスタントガイド」として認定していただき、証書もいただくことができました。また一部の受講生は、その後甲府市・甲斐市が実施した、文化庁「日本遺産魅力発信誘客促進事業」にも参加しました。同講義の展示報告会を開催し、100名ほどの来場者がありました。

【ネイチャーガイド演習2 受講者アンケート】



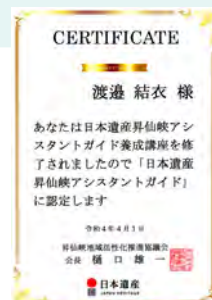
- ・アシスタントガイドの必要性が実感できた。
- ・古道の歩き方について学ぶことができた。



- ・ガイド付きで昇仙峡を歩いたことがなかったため、非常に良い機会となった。
昇仙峡の・歴史、地形など専門的なお話が伺え、昇仙峡の魅力に改めて触れられた。



- ・ガイドの方ならではの経験談を伺えたことが良い機会であった。
- ・「山梨には何も無い」なんて冗談でも言えないと思った。



日本ワイン歴史マイスター養成講座

担当講師：仲田道弘、杉山歩

【科目の目的】

日本で唯一、歴史を通して日本のワイン文化を学ぶことのできる講座です。世界のブドウの歴史、中国ワインの歴史、そして古代から現代に至るまでの日本のブドウとワインの歴史について1000枚を超えるスライド資料でビジュアル的に学びます。特にこれまで体系的でなかった明治時代のワイン造りについては、14人の挑戦と情熱を伝えます。間違いなく日本ワインの歴史観が変わる瞬間を体験でき、私たちがこれから進むべき方向性が見えてくるでしょう！

【授業内容】

第1回（10/2）ワイン歴史概論

（1）ワインとは （2）世界のブドウとワインの歴史 （3）中国のブドウとワインの歴史

第2回（10/16）日本のブドウの歴史

（1）甲州ブドウはどこから来たのか？ （2）日本のブドウの歴史

第3回（11/13）日本ワインの歴史（古代～明治-1）

（1）日本のワインの歴史 （2）明治期ワイン造りの全貌

第4回（11/20）日本ワインの歴史（明治-2）

（1）津田仙 （2）山田宥教 （3）詫間憲久

第5回（11/27）日本ワインの歴史（明治-3）

（1）藤村紫明 （2）大藤松五郎 （3）桂二郎

第6回（12/4）日本ワインの歴史（明治-4）

（1）高野積成 （2）前田正名 （3）高野正誠、土屋龍憲

第7回（12/11）日本ワインの歴史（明治-5）

（1）宮崎光太郎 （2）神谷伝兵衛、近藤利兵衛 （3）川上善兵衛

第8回（12/18）日本ワインの歴史（大正～今日）

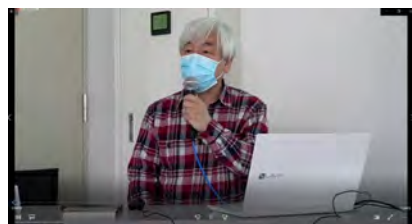
（1）大正・昭和期 （2）平成・令和期 （3）日本ワイン市場の現状

講義を振り返って

事務局の皆さんにはたいへんご苦勞頂きましたが、毎回150枚くらいの講義スライドを1週間前に配布して受講効果を高めました。受講者の方々は、日本ワインに興味を持っている方々、ソムリエなどご商売でワインを扱っている方々で、貪欲に知識の吸収がされたと感じています。皆さん、この分野の体系的な学習は始めての様子でしたが、この講座をきっかけに更に学習を進めるとの感想も多く寄せられています。

また、この講座は、平成2年度から開催していますが、オンラインでの開催ということもあって、東京や大阪、名古屋はもちろん、北海道や九州、さらにはロンドンなどからも受講される方々がいました。2年間で約100名の受講者がいて、山梨県立大学が日本ワインの歴史を教えるトップランナーとなったと感じています。

なお、ワインと触れることがあまりなかった学生に向けては、別途「山梨ワイン入門講座」を令和4年度から開催することとしました。重層的にワイン文化教育が続けられることで、山梨の魅力がさらに発信されることが期待されます。



講義を通して見えた変化や効果

受講者の感想のとおり、それぞれのスキル向上に繋がったことはもちろんですが、この講座の概要が「日本ワインの教科書」（早川書房）として令和3年8月に発行され、この本をテキストとした「日本ワイン検定」が始まりました。

また、笛吹川フルーツ公園の展示館では、この講義をベースとした企画展示が令和4年夏から始まります。多くの人が日本ワイン、山梨ワインに興味を持つことによって、きっと地域経済の活性化につながっていくでしょう。



【日本ワイン歴史マイスター養成講座 受講者アンケート】



◆ 山梨県 ワイン愛好家

講座は毎回ワクワクするもので、想像を越えるスケールの大きなものでした。たくさんの方々の苦勞を学びましたが、桂二郎氏と川上善兵衛氏が特に印象に残りました。今、美味しいワインが頂けるのは先人たちの熱い気持ちと挑戦の歴史と思うと、改めて有り難くなりました。たくさん資料と写真で分かりやすく楽しみながら学ばせて頂きました。



◆ 東京都 シニアソムリエ

今まで私は、書物等を中心に日本ワインの歴史を学んできたつもりになっていました。でもこの講座を受けて、年号や出来事を記憶する勉強方法では全然ダメだという事に気がきました。人が造るワインですから、人が何を考え何を望んだ結果なのかを想像するのがとても大切で、それこそが本当に歴史を理解するという事だと感じました。



◆ 山梨県 ワイン醸造家

生産現場にいてもここまで詳しい知識は持ち合わせていませんでした。どれほど様々な人物や地域、国や民間の思惑が関わっているのか。どれほどの情熱があったのか。そしてその一つ一つが現代のワインに連綿と続いているのだと思うと、小さな醸造所を営むこともまた壮大な歴史の流れの中にいるのだと意識せずにはいられませんでした。



【明治期ワイン造りの全貌】



おもてなしマイスター養成講座

担当講師：高野登（人とホスピタリティ研究所：元リッツ・カールトン日本支社長）

【科目の目的】

「おもてなし」は一方的に提供する「サービス」のことではありません。同じ目線に立ち、相手の気持ちになって行う誠意ある対応のことです。そうして、温かな人間性が触れ合った瞬間に「感動」が生まれるのです。つまり「おもてなし」とは、相手に自分の心を寄り添えて対話をする姿勢そのもののことです。心は相手に見えなくても、心遣いや心がけ、心構えはちゃんと伝わります。

「おもてなし（ホスピタリティ）」は、観光に携わる人たちだけのものと思われがちですが、そうではありません。「おもてなし」の語源は、聖徳太子の「和を以て尊しと為す」までさかのぼると言われます。すなわち、「何を以て何を為す」のかを常に心に思い描くということです。

本講座では、サービス・ホスピタリティの意味を理解し、さらにブランディングや付加価値創造について事例を中心に学びます。また、付加価値創造を生み出すための人材育成や組織経営のあり方についても学びます。

【授業内容】

- 第1回（10/8）ホスピタリティ
サービスからホスピタリティへ～価値創造のパラダイムシフト～
- 第2回（10/29）付加価値
サービスを超越する瞬間～価値を生み出す働き方～
- 第3回（11/19）ブランディング
進化するホスピタリティ～感性価値のパラダイムシフト～
- 第4回（11/26）働き方
社員が仕事にワクワクする姿を実現する方法
- 第5回（12/10）モチベーション
ホスピタリティ溢れる組織づくり～モチベーション・アップを目指す～
- 第6回（12/24）リーダーシップ いまリーダーに求められるもの
- 第7回（1/21）顧客満足 感動と伝説が生まれる舞台づくり
- 第8回（1/28）耀く組織の作り方 ～すべては感謝と笑顔から～



元リッツ・カールトン日本支社長。2009年にリッツ・カールトンを退社後、「人とホスピタリティ研究所」を設立。以来「ホスピタリティの伝道師」としてセミナーや講演、研修などで全国を飛び回り、企業・病院・学校・自治体などの組織づくりや観光経営のサポートに尽力され活躍されている高野登先生による全8回のオンライン講義を頂きました。手書きの紙芝居を使った講義スタイルに、リッツカールトンのお話や様々なホスピタリティについての事例、おすすめの書籍紹介など、高野先生の笑顔とともに、とても充実した内容の講義となりました。

【おもてなしマイスター養成講座 受講者の感想 ※一部抜粋】



何度も重ねて視聴したいと感じた、素晴らしい授業でした。今回の授業では今後の流れを元に、包括的に各セクションのお話を頂きましたが、そのお話の中でも常に高野先生は微笑まれながらお話をされており、私が受講してきたどの授業よりも内容がスッと胸に落ちていく感覚を覚えました。



講義内容を分かりやすく伝えるために準備してくださり、手書きのスライドならではの良さであるあたたかい部分が伝わってきました。印象に残る言葉がたくさんありました。本を読む重要性をあまり理解していなかったのですが、この講義を聞いて、自分にはない考え方を身に着けたうえで自分の判断をするために必要なのかなと納得することができたので、これから色々読んでみようと思いました。



「人の成長はひとりでも多くの人の役に立てるようになること」これは斬新な考え方だなと思った。成長とは自分のためにするものだと思っていたが、人のためになってはじめて自分のためになるのだなという視点をえることができた。



「ブランド」という捉えどころのないように感じていたものが、おぼろげながら見えてきたように思いました。特に「自分自身を表現する言葉を持つことがブランディングの第一歩」というお話が印象的で、ブランド作りを何から始めるのか、非常に良いヒントをいただいたように思います。



高野先生が話す時の笑顔が素敵で視聴している私がなんか少しホッとしました。講義を通して高野さんのホスピタリティはとてつもないものだと感じました。自分だったら、気付かないところまで気付いている。そこに気付ける自分の思考というか見方も重要だと感じました。



自分の考えや価値観を持つためには、まずは多様な価値観のインプットが必要なんだと改めて感じました。学びの本質はとても難しいなと感じましたし、自己満足や、偏った考え方・価値観の押し付けにならないように、何歳になっても学び続ける姿勢でいたいなと思いました。



思いを言葉にしてしっかりと伝え、悪いことよりも良いことをどんどん共有できればチームとして共鳴できる、そのためには本気で相手と向き合って、相手にも本気で向き合ってもらうことが重要なんだと学びました。また、お話の中にあつた「一日のうち本気になれる時間」を多く作っていきなさいと思いました。



モチベーションの講義と併せて、目指すべき組織とリーダーの在り方がおぼろげに見えてきました。実態はかなり遠いところであって、やるべきことが膨大ですが、一つ一つ実践していきなさいと思います。



これから社会人として働くことになりましたが、将来人の上に立つ立場になったとしたら、今回の話を思い出して、高野先生のように若い世代の考え方を取り入れられるような柔軟な考えを持った人物になりたいです。

【開講中止】

自然文化からの価値創造1（料理とワインのマリアージュ）

担当講師：長谷部 賢（日本ソムリエ協会理事）

【科目の目的】

本講座では、ワインの基本的な特性について理解してもらいます。また、料理（和食・洋食・中華など）の特性についても理解してもらいます。

次にワインと料理をどのように組み合わせると相乗効果が発揮されるのか、基本的なルールについて理解してもらいます。そして、料理人が県産の食材を活用して、どのようにワインと組み合わせしていくのか実際に料理をしていただきながら、体験的に学びます。

【授業内容】

第1回（1/22）料理とワインのマリアージュ概論（オンライン講義）

田崎 真也氏：（一社）日本ソムリエ協会 会長、ワイン県やまなし副知事

第2回（2/9）和食とワインのマリアージュ

天野 洋喜 氏：忍野八洲 店主

第3回（2/16）洋食とワインのマリアージュ

五味 丈美 氏：ビストロ・ミル・プランタン 店主

土屋 義幸 氏：ビストロ・ミル・プランタン シェフ

第4回（3/2）中華とワインのマリアージュ

宮本 哲実 氏：ハイランドリゾート ホテル&スパ 前総料理長

渡辺 浩章 氏：ハイランドリゾート ホテル&スパ 料飲統括 シェフソムリエ

第5回（3/9）チーズとワインのマリアージュ

吉田 真弓 氏：レストランボンマルシェ ソムリエール・チーズプロフェッショナル

第6回（3/16）まとめ

長谷部 賢

※第2～6回は、新型コロナウイルス感染拡大により、関係者との協議の上、中止。

講義を振り返って

新型コロナウイルス感染拡大により、日本ソムリエ協会会長であり、ワイン県山梨の副知事でもある田崎真也氏による記念講演のみを実施した。

講演では、料理とワインのマリアージュ（表現はペアリングが一般的とのこと。）の基礎について、氏の豊富な知識と経験から、講演に参加したワイン初心者にもわかりやすく解説していただいた。さらに、霜降りの和牛に乳酸発酵したシャルドネ（白）の組み合わせを提案され、私たちの常識である「肉料理は赤ワイン、魚料理には白ワイン」にとらわれないペアリングの妙、奥深さを知る機会にも触れることができた。

本講座については、極めて人気が高く、申込者多数であったため、来年度は座学と併せて、本年度実施できなかった県内飲食店が創作した料理と県産ワインを楽しむ講座を2回にわたって実施することを計画している。あわせて、他県からの入学生をはじめとする初心者に向けて、ブドウ畑の作業や収穫体験などを盛り込んだ「やまなしワイン入門講座」の新規開設の検討を進めている。

【未開講】

- ・地域しごと概論（民間企業）
- ・自然文化からの価値創造1（アドベンチャー・ツーリズム概論）
- ・通訳入門実践
- ・実用中国語
- ・地域ブランドマネージャー養成講座

9. 授業実施報告（地域づくり加速化人材育成プログラム）

コミュニケーション手法

担当講師：田中 友悟

【科目の目的】

複雑化する地域課題に向き合うためには、立場や主張を超えたコミュニケーションが必要となります。本科目は社会課題解決のためのコミュニケーション能力の習得を目的として、参加・共創型社会に求められるファシリテーションの技術・姿勢を実践的に学びます。

【授業内容】

第1回(6/18) オリエンテーション

第2回(6/25) コミュニケーションの技法を学ぶ「ワークショップとは何か／話し合いの可能性」

第3回(6/25) ワークショップ演習

第4回(7/9) コミュニケーションの技法を学ぶ「ファシリテーションとは何か①／合意形成と価値創出」

第5回(7/9) ファシリテーション演習

第6回(7/16) コミュニケーションの技法を学ぶ「ファシリテーションとは何か②／集団での学びをデザインする」

第7回(7/16) ファシリテーション演習

第8回・第9回(7/30) コミュニケーション実践演習「コミュニケーションをデザインする／準備編」

第10回～13回（8/17）コミュニケーション実践演習「コミュニケーションをデザインする／実践編」

第14～15回（10/22） コミュニケーション実践演習「コミュニケーションをデザインする／振り返り編」



講義を振り返って

日常生活から仕事の間でも活用できるコミュニケーションのデザインについて、「ファシリテーション」「ワークショップ」の領域から、思想的背景や具体的な企画・運営方法までを演習形式で学ぶことができた。講義は基本的に座学と演習の2コマをセットで行い、理論を実践の中で確認する構造を採用した。ファシリテーションの基本技術からワークショップの設計方法までをコンパクトに共有したが、やや内容が詰め込みすぎだったように思うので、次回以降はもう少し簡潔に難度を下げるよう検討したい。学生さんにとってのコミュニケーションの課題を明確にした上で授業を始めたので、各自が苦手とする部分や必要と感じている技術を身につけることはできたように思う。最終回の地域集落でのファシリテーション実践では、現場の多様な参加者と共に場をつくる難度の高い体験をしていただき、新しい気づきや学びを持ち帰る機会となった。少人数の講義だったため、各受講生の課題意識を容易に把握できたが、人数が多くなると別の方法でのコミュニケーションの仕組みも必要のように感じる。

講義を通して見えた変化や効果

当初は「ファシリテーション」「ワークショップ」について詳しく知らなかった受講生が、よいコミュニケーションを設計する上での具体的な手法や視点を獲得し、日常に活かせるような学びを獲得していただいたように思う。また、コミュニケーション能力だけではなく、その前提として必要となる「問題設定能力」についても積極的に学んでいただき、さまざまな場面で求められる批判的思考力の重要性についても理解いただくことができた。

情報発信の手法

担当講師：兼清 慎一

【科目の目的】

情報の送り手と受け手がメディアテキストを介したコミュニケーションを通じて価値を共創するという考え方を知り、コミュニケーションのデザインプロセスを体感することを目的とする。また、メディアコミュニケーションは価値創造の手段でしかない。そこで、サービス・ドミナント・ロジックや文化のデザインといった価値共創の考え方を知ることにも目的とする。

同時に、情報発信をする理由は何か、メディアテキストを介したコミュニケーションを通じて目指していることは何か、受講者自らが省みることも目的とする。

【授業内容】

第1回(6/23)：情報発信に対する基本的な考え方

第2回(6/25)：価値共創に関する考え方

第3回(6/27)：コピーライティングのワークショップ～コンセプトとは

第4回(6/27)：コピーライティングのワークショップ～コンセプト制作力

第5回(7/3)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：ガイダンス

第6回(7/3)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：鑑賞理解力

第7回(7/3)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：物語発見力

第8回(7/3)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：演技表現力

第9回(7/4)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：制作実現力

第10回(7/4)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：制作

第11回(7/4)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：制作

第12回(7/4)：映画を使ったワークショップ～シネマアクティブラーニング：上映と評価

第13回(7/11)：ディスカッション～ワークショップの意味を振り返る

第14回(7/11)：文化のデザイン

第15回(7/12)：メディアコミュニケーションのデザイン



講義を振り返って

情報発信の手法を教授するのではなく、情報発信という行為の意味について考えてもらうことを目的として授業を設計した。その理由は、情報発信に有効な手法など存在しないし、有効な手法があるという考え方自体、情報の受け手の思考を尊重するという最も重要なことを見失わせるからである。そこで、情報の送り手と受け手が価値を共創するという視座を学生と共有することを目指した。視座として用いたのは、価値共創のパスpekティブとして知られるサービス・ドミナント・ロジックである。

授業はグループワークを中心とし、複数の大学から複数の学年の学生が参加したこともあり、前半はアイスブレイクに時間を割いた。グループワークでは、コピーライターと映画監督を講師に迎えた。コピーライターのグループワークでは、講師が実際に手がけた事例を題材とし、顧客とのコミュニケーションを通じて、消費者が何を望んでいるのかを読み解くことが、見映えのいい言葉を探すことより重要であることを共有した。映画監督のグループワークでは、チームでショートムービーを制作し、メンバーそれぞれの個性をいかに生かしなが作品をつくりあげることで、共創というプロセスがもたらすものの意味を感じ取ってもらった。

講義を通して見えた変化や効果

授業の締めくくりに学生のコメントを読むかぎり、学生に変化があったとすれば、協働という場においては、ほかのメンバーの長所を尊重すること、そしてなにより自身の長所を大切にすることに意味があることを知ったのではないだろうか。自分の言いたいことを相手に伝える情報発信も重要である。しかしながら、不確実で正解のない課題に取り組むには、手元にある限られた資源をやりくりしながら粘り強く価値を共創するという意識が必須である。そのとき重要なのは、他者に対する敬意と自身への信頼である。学生の言動や態度からはその意識を感じ取ることができた。

【情報発信の手法 受講者アンケート】



インターンシップや就活で自己分析シートを書くことに不安がありましたが、ワークショップで書くことに取り組んだことで自分の新しい強みの発見に結びつきました。



今回の授業で学んだことは人生に活かすことのできるものばかりでした。



自分が思っている完成度と、人が思っている完成度は違う。自分がダメだと思ったものを、先生や皆は褒めてくれたし、いいねと言ってくれた。自分にいいねをしてあげたいし、相手にもいいねをしてあげたいと思った。

地域課題解決（観光・地域プログラム共通科目）

担当講師：田中 友悟

【科目の目的】

地域課題の解決には、問題を捉えて構造化する分析力、資源をつなぎあわせて価値をうみだす編集力、活動を事業へと育てていく起業力など、複合的な能力が求められます。本科目では、抽象的な「まちづくり」という概念を捉えなおし、「作ること」と「使うこと」の視点から私たちの生活と地域課題解決を結ぶまちづくりの技術・姿勢を学びます。

【授業内容】

第1回(10/27) オリエンテーション

第2-3回(11/10) 講義「地域課題解決とはなにか／私と地域課題のあいだを考える」

第4-5回(11/17) 講演「地域課題解決のケーススタディ」株式会社epitec代表取締役 藤川遼介さん

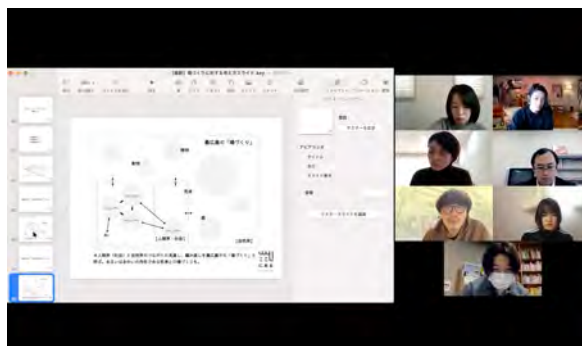
第6-7回(12/1) 講演「地域課題解決のケーススタディ」福知山市役所 中田愛さん×倉寿和さん

第8-9回(12/8) 講演「地域課題解決のケーススタディ」株式会社RE-SOCIAL代表取締役 笠井大輝さん

第10-11回(1/12) 講演「地域課題解決のケーススタディ」株式会社ファミリーツリー代表取締役 安藤仁希さん

第12-13回(1/19) 講演「地域課題解決のケーススタディ」株式会社ここにある代表取締役 藤本遼さん

第14-15回(1/26) 自身のまちづくり論の発表・振り返り



講義を振り返って

世代や所属が異なる受講生の方々と共に「まちづくり」という言葉を捉え直すことで、自分たちの所属する地域や会社との関わり方を再考する機会となった。抽象的な言葉として多義的に理解されている「まちづくり」から、その核となる部分を抽出すると、それは「公共財の創出」として定義することができる。非競争性、非排除性のどちらか一方をもつ財をつくる営みは、日常生活や会社活動の中に既に存在している。そのように、自らが図らずしも関わっているまちづくりを認識する目をもつことが、継続的なまちづくりへの第一歩だというメッセージを共有することは達成できたように思う。また、ゲスト講師の話題提供をもとに、各受講生の現場に持ち帰れる視点を対話形式で可視化していくプロセスでは、問題設定を更新していく質疑や対話の力を再確認することができた。受講生が少人数だったため密な対話ができただことは良かったが、もう少し多くの視点があれば学びはより深まったようにも思う。授業外での自主学習の仕組みがあれば、より実践的な技術や思想を獲得できるように感じたので、次回以降に活かしたい。

講義を通して見えた変化や効果

授業をととして、抽象的な言葉として多義的に理解されている「まちづくり」の意味を理解したことで、自身の置かれた現場でまちと関わる具体的な思考や手法について学びを得ることができたように思う。また、受講生が日々感じている悩みや葛藤が、講義の内容をととして解決していくような場面もみられ、実践知教育として一定の成果があったように思う。

地域課題解決演習（観光・地域プログラム共通科目）

担当講師：田中 友悟

【科目の目的】

地域課題の解決には、問題を捉えて構造化する分析力、資源をつなぎあわせて価値をうみだす編集力、活動を事業へと育てていく起業力など、複合的な能力が求められます。本科目では、実際の地域課題を題材に企画提案を試みることで、まちづくり人材に必要な実践的な思考法やプロジェクト立案力を身につけることを目指します。

【授業内容】

第1回（11/10）オリエンテーション

第2回（11/17）地域課題解決事前演習／地域を知る

第3-5回（12/4）地域課題解決演習①／地域を捉える

第6-7回（12/17）地域課題解決演習②／解決方法を考える

第8回（1/19）課題解決プランの発表・振り返り



講義を振り返って

多様な現場で地域と関わる受講生の方々との演習だったので、それぞれが日々抱えている明確な問題意識に基づいて、具体的な学びを持ち帰れる授業になったように思う。新型コロナウイルス感染症の影響で、地域の現場に足を運ぶことが十分にできなかったことが悔やまれるが、フィールドワークやワークショップのわずかな時間の中で地域をリサーチする視点を獲得していただけたように思う。大学生さんよりも、現場に活かせる学びを得たいと考える社会人の方が積極性が高く、地に足のついた意見も多かった。受講生の多様性が相互に影響し、学び会えるような設計が重要だと感じた。また社会人の受講生が多かったため、オンライン授業を併用して仕事終わりの夜に会議を行うことも多かったが、日々の業務と並行して講義の課題を進めてもらうことの難しさを感じた。なるべく授業の時間内で一定の技術や思考法をコンパクトに伝えることを意識しながらも、実際に存在する地域課題の複雑性に気づけるような授業設計を心がけていきたい。

講義を通して見えた変化や効果

授業をとおして、抽象的な言葉として多義的に理解されている「まちづくり」の意味を理解したことで、自身の置かれた現場でまちと関わる具体的な思考や手法について学びを得ることができたように思う。また、受講生が地域課題に向き合う上での具体的な思考法やコミュニケーション方法が身についた方が多かったように思う。歴史や文化を扱う上で、その土地に住む人を含めた地域社会を捉えることの必要性を伝えられたと感じる。

地域課題創造的解決演習（観光・地域プログラム共通科目）

担当講師：佐藤 文昭、佐野 信也

【科目の目的】

今日、SDGs（持続可能な開発目標）が注目を浴びる中で、このテーマを自分自身が取り組むこととして捉えることが難しいことであることも事実です。一方で、短期的かつ対症的に解決策を求めるのではなく、そこにある課題や問題の本質を掘り下げることにより、目指すべき未来に気づくことが出来るでしょう。新たな未来を創造するための技術である「U理論」のプロセスに基づいて、「ビジネスモデルキャンパス」や「免疫マップ」などのツールを用いて、自分自身と社会との関係について掘り下げていきます。それを通じて、ひとり一人にとって本当に必要となる「変化」を生み出すことを目指します。この「変化」を踏まえて、改めてSDGsと自分自身とのつながりについて考えます。

【授業内容】

- 第1回（9/30） オリエンテーション
- 第2回（10/5） 自分自身の「ビジネスモデルキャンパス」をつくる
- 第3回（10/12） 「免疫マップ」をつくる
- 第4回（10/21） U理論その1（保留・視座の転換）
- 第5回（10/26） U理論その2（手放す）
- 第6回（11/2） 「免疫マップ」を紐解く
- 第7回（11/9） 「ビジネスモデルキャンパス」の変化を実感する
- 第8回（11/16） 発表・振り返り

講義を振り返って

U理論をテーマに、今見えている課題ではなく、その根底にあるひとり一人の意識や価値観、固定観念などを明らかにすることで、現状を生み出している自己の意識に気づき、そこから変革につなげていくために、「パーソナルビジネスモデル」や「免疫マップ」などのツールを用いて様々なワークを行った。

授業は、ゲスト講師の佐野氏による解説やワークを中心に行ったが、従来の知識やスキルを身に付ける授業とは大きく異なり、自己を深く見つめる内容となったことは、学生にとっても新鮮な学びの機会となったと感じている。

講義を通して見えた変化や効果



大学の授業の中で、自己の内面と深く向き合うことを目的としたものは少ないと考えられる中、自己に対する理解を深めることで、学生ひとり一人が新たな気づきを得ることが出来たことが、一番大きな成果であると考えられる。

【地域課題創造的解決演習 受講者アンケート】



授業を受けるたびに新しい感覚が身につくようでとても新鮮でした。少人数で自分の意見を話す講義が少なかったため、他者の意見や考えも聞ける良いきっかけにもなりました。そして、自分自身をさらに高め、自己を理解し、自信が持てる成長ができたと思います。



この度は、とても面白い講義をしてくださりありがとうございました。他のペンタスの科目とはひと味違い毎回タメになる時間でした。自分の中でモヤモヤが生まれた時にどう自分に向き合えばいいのか、どう深く考えるか、そんな身近な課題解決の手法でもある内容でもとても救われ、成長した機会がありました。特に改善点はないです。来年もこんな感じでやってほしいなと思います。ありがとうございました。

地域づくり人材育成講座

担当講師：佐藤 文昭、保坂 久

【科目の目的】

今日、地域が抱える問題が多様化・複雑化する中で、行政のみで解決していくことは困難な時代であると言えます。そのため、市民や民間事業者、教育機関、報道機関など、地域の多様な主体がお互いに連携協力しながらその解決に取り組むことが求められています。

長年行政の立場から市民活動に携わってきた実践者をゲスト講師として、多様な主体の関係性について法制度面や実際の取り組みを通じて理解を深めるとともに、その問題点を共有します。さらに、グループワークを通じて、市民協働により新たな地域づくりを生み出していくためのプロセスやプロジェクトのつくりかたについて実践的に学びます。

【授業内容】

第1回（10/1）地域づくりとは（今に満足しているなら「地域づくり」はいらない）

第2回（10/8）地域を構成する要素（地域づくりをはじめるのなら、地域は何で出来ているのか知る必要がある）

第3回（10/15）地域づくりのハードル（ルールの基本は民主的ですがすぐに変えられそうだが、現実はどうではない）

第4回（10/22）地域づくりの戦略（漫然と暮らしに対する不満や課題を感じているが、それが何なのかを明確にする）

第5回（10/29）先進事例から分かること（何を背景に、どんな課題を見つけ、どのような取り組みで解決しようとしたのか）

第6回（11/5）地域づくりに取り組む（グループ演習）（先進事例からの学びをもとに、現実的な取り組みをつくってみる）

第7回（11/12）地域づくりに取り組む（個人演習）（自分が地域づくりのプレーヤーとしての企画をつくる）

第8回（11/19）発表・振り返り（地域づくりの入り口を知る人が増えると、きっと地域が変わる）

講義を振り返って

元行政職員のゲスト講師を中心に、長年の経験に基づいて行政職員に必要なことや物事の考え方など、知識やスキルというよりも、行政職員としての姿勢や視点を学ぶ内容であった。

具体的な課題に基づきグループワークを中心に行ったことで、地域づくりという答えのない問いに対してひとり一人が深く考えそれを共有し、教員や他の学生からフィードバックを得るという場を設けることができた。特に公務員志望の学生にとって、実際の行政の業務を知る機会になったと考えられる。

また、南アルプスにおいてマウンテンバイクを通じて地域づくりを実践している弐間氏をお招きして、地元住民との関係づくりを通じた取組から、夢を実現したいという強い思いと、そのために他者との関係づくりを大切に取り組んできたことなど、地域づくりに取り組む上で大切なことを学ぶことができた。

講義を通して見えた変化や効果

普段触れることのない行政職員の具体的な業務やその中で職員に求められる資質や姿勢など、通常の授業では知ることのできない情報を経験談を通じて得ることが出来たことは、将来公務員を目指す学生が将来の仕事について具体的にイメージする上での貴重な機会であったと考えている。



【地域課題創造的解決演習 受講者アンケート】



クリエイティブでとても面白く、地域で何かをしていくうえで有意義な知識を得られる講義で、授業時間の90分が本当にあっという間に過ぎてしまうほど充実していた。特に私自身公務員を目指している中で、保坂先生のちょっとした裏話や経験談など、後学となるものが多かった。しかし、グループワーク課題、2週間では荷が重かったように感じた。そのため、自身の提案をもう1、2回ブラッシュアップできるような時間を作ってほしい。ただ全体として、期待していた以上に面白く得るものが多い講義であり、今後地域づくりを担う人材に適うような活動を進めていきたい。3ヶ月間、ありがとうございました。



私が公務員志望だったので、県庁職員さんや市役所職員さんと関わることができたことがまずこの授業をとてもよかったと思った理由でした。そして、これからの公務員に求められる姿は変わってくると思っているので、地域づくりを学ぶことができたこと、それを仕事している人と関わることができたことはとても大きな勉強だと思いました。

地域づくり人材育成演習 1

担当講師：佐藤 文昭、前田 将司、清水 洋介

【科目の目的】

8月に開館する「やまなし地域づくり交流センター」は、様々な社会的課題の解決に資する事業創発を支援することを目的としています。

本科目は、受講者が関心を持つ社会的課題をテーマとして、行政や事業者、専門家とともに基礎的な調査研究を通じて社会的課題の理解を深め、解決策を見いだすためのプロセス及び手法を実践的に身に付けることを目的とします。

【授業内容】

- 第1回 (9/4) オリエンテーション
- 第2回 (9/4) テーマを設定する
- 第3回 (9/4) 社会的課題を深める：現状把握（その1）～データを探す
- 第4回 (9/4) 社会的課題を深める：現状把握（その2）～データを読む
- 第5回 (9/4) 社会的課題を深める：視座の転換（その1）～当事者の話を聴く
- 第6回 (9/13) 社会的課題を深める：視座の転換（その2）～当事者に共感する
- 第7回 (9/13) 社会的課題を深める：新たな「問い」を立てる（その1）～問題を可視化する
- 第8回 (9/16) 社会的課題を深める：新たな「問い」を立てる（その2）～レバレッジポイントを見つける
- 第9回 (9/16) 解決策を探る：アイデアづくり（その1）～アイデアを出す
- 第10回 (9/22) 解決策を探る：アイデアづくり（その2）～アイデアを絞り込む
- 第11回 (9/22) 解決策を探る：プロトタイピング（その1）～アイデアを形にする
- 第12回 (9/23) 解決策を探る：プロトタイピング（その2）～アイデアを試す
- 第13回 (9/23) プレゼンテーション～アイデアを伝える
- 第14回 (9/23) ディスカッション
- 第15回 (9/23) まとめ・振り返り

講義を振り返って

参加者ひとり一人の社会的課題を、事業づくりのプロセスに基づいて事業を形づくりところまでを行った。コロナ禍で、大半の授業がオンラインとなったが、オンラインホワイトボードMiroを活用し、各自のワークをオンライン上で共有しながら、効率的効果的に授業を行うことができた。

「強制発想」などにより、いままでなかったアイデアを生み出す手法などを実践することで、志向の幅やアイデアの可能性を広げることが出来たと考えている。

検討に際しては、山梨総研研究員が学生に対して個別に指導に当たるなど、きめ細かなサポートを行った。

講義を通して見えた変化や効果



デザイン思考に基づいて、当初の課題意識を、データ分析やインタビューなどを通じて深めていくことで、新たな事業のアイデアを導き出すことができた。それにより、当初は抽象的だった各自の考えを、解決のための事業アイデアとしてまとめることができたことで、問題解決に至る一連のプロセスを経験することが出来たと考えている。

地域づくり人材育成演習 2

担当講師：佐藤 文昭、渡邊 たま緒、廣瀬 友幸

【科目の目的】

月に開館する「やまなし地域づくり交流センター」は、様々な社会的課題の解決に資する事業創発を支援することを目的としています。その中で、昨今関心が高まっているSDGs（持続的開発目標）をテーマに様々な取り組みを行う予定としています。

本科目では、本センターで開催予定のSDGs関連イベントの企画から実施までを通じて、SDGsに対する理解を深めるとともに、多様な主体との協働によるイベントを生み出すために必要となるプロセスやスキルを身に付けることを目的とします。

【授業内容】

第1回（11/25）オリエンテーション

第2回（12/9）SDGsの理解を深める（その1）～ワークショップ

第3回（12/9）SDGsの理解を深める（その2）～ワークショップのまとめ

第4回（12/16）企画立案（その1）～目的の設定

第5回（12/16）企画立案（その2）～アイデア出し・絞り込み

第6回（1/6）実施計画の検討（その1）

第7回（1/6）実施計画の検討（その2）

第8回（1/20）実施計画の検討（その3）

第9回（1/20）実施準備（その1）

第10回（2/3）実施準備（その2）

第11回（2/3）実施準備（その3）

第12回（2/19）イベント実施支援（その1）

第13回（2/19）イベント実施支援（その2）

第14回（2/19）イベント実施支援（その3）

第15回（2/19）発表・振り返り



講義を振り返って

学生のSDGsに対する問題意識に基づいて、2月19日(土)にオンラインにより「昆虫食を通じてSDGsについて考える」及び「働くことを通じてSDGsについて考える」の2つのテーマでイベントを企画・実施した。昆虫食については、山梨大学のNPOとの連携により、また働くことについては、地元企業にご協力をいただき、オンラインでのセミナーや対話の場を設けることができた。

企画段階からイベントに携わる学生が多かったことや、検討の途中段階でイベントが対面からオンラインに変更となったこともあり、手探り状態ではあったものの、学生自らがやってみたいと考えるイベントを形にすることができた。

検討過程では、山梨総研研究員2名と交流センターの職員が、グループ内の合意形成やディスカッションのファシリテーション、企業の紹介などのきめ細かなサポートを行った。

講義を通して見えた変化や効果

SDGsという学生にとって距離感のあるテーマについて学生ひとり一人が自分事として捉え直すことにより、このテーマをより身近に捉えることができるようになったと考えている。

また、イベントについては、学生からもっと積極的に取り組むべきだったとか、早めに準備をすべきだったといった反省の声があったが、主体的に関わることの大切さや、イベントの見えないところにある様々な苦勞を知ることができたことは、今後自分自身が何かを企画する際に活かすことの出来る貴重な経験となったと考えている。

【地域づくり人材育成演習 2 受講者アンケート】



イベントを運営するということの裏にはこんなにもやらなきゃいけないことがあるということを知ることができました。反省点としては、準備の段階からもう少し積極的に学生同士で連携できていたら良かったなと思いました。



当日は楽しんでやることができて良かったです。もう少し早く準備をして、早めにイベントの宣伝もしていたら、より多くの人にイベントを知ってもらえたと思うので、そこが反省点です。突然オンラインになったことが苦勞しましたが、オンラインならではのイベントにできたと思います。

10. 特別授業実施報告

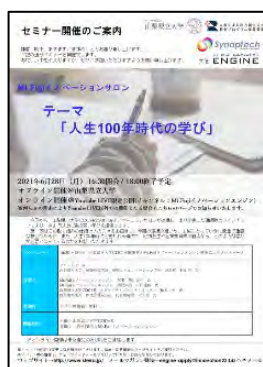
アントレプレナー教育の一環として山梨県で起業・創業支援を行うシナプテック株式会社や一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジンと協力し、地方における創造的課題解決人材の育成を目的に特別授業を令和3年度は8回実施した。

参加人数

	参加形態	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	合 計
学 生	対 面	0	2	-	-	1	2	-	0	5
	オンライン	10	4	4	2	2	4	2	2	30
社会 人	対 面	9	4	-	-	3	2	-	24	42
	オンライン	4	28	7	11	5	4	15	10	84
合 計		23	38	11	13	11	12	17	36	161

※第3回・第4回は新型コロナウイルス感染症拡大防止のためオンライン配信のみ

特別授業内容



第1回「人生100年時代の学び」

開催日時：令和3年6月28日（月）16：30～18：00

内容：本事業における連携の狙いや、山梨県にとっていかに貴重で重要な機会であるか。また、人生100年時代と言われる現代で、地方創生や起業家育成の観点から、どのような学びが必要になってくるかを学ぶ。

登壇者：ファシリテーター：山梨県立大学 国際政策学部 准教授 杉山歩 氏
Mt.Fujiイノベーションエンジン 理事 廣川克也 氏
Mt.Fujiイノベーションエンジン 事務局長 戸田達昭 氏
山梨県立大学COC+R エグゼクティブコーディネーター 船木上次 氏
農業生産法人 株式会社hototo 代表取締役 水上篤 氏



第2回「地方におけるメイキング～未来なき時代をつくる編集と制作～」

開催日時：令和3年7月28日（水）17：00～19：30

内容：山梨県内ではn次創作者が少なく、内発的に新しい事業が生まれづらいのが現状がある。このような現状を打破するために必要な力として、「編集」という機能が1つのヒントになるのではないかと考え、n次創作者とコンテンツ制作（一次制作）の知見を通して、広義の「つくる」を地方で広げるヒントを学ぶ。

登壇者：・講演 黒鳥社 コンテンツディレクター 若林恵 氏
・トークセッション
山梨県立大学 国際政策学部 准教授 杉山歩 氏
一般社団法人 Mt.Fujiイノベーションエンジン 事務局長 戸田達昭 氏
一般社団法人 山梨市ふるさと振興機構 代表理事 田中友悟 氏

第3回「山梨発ベンチャー スタートまでの軌跡」

開催日時：令和3年8月30日（月）16：30～18：00

内容：山梨発ベンチャーで、県内外で活躍している起業家の学生時代やサラリーマン時代にフォーカスし、何を考え、どのような活動を行ってきたか。どのような転機があり起業に至ったのか成功談や苦労話を聞くことで、様々なキャリアの在り方を学ぶ。

登壇者：・ゲスト 株式会社コークッキング 代表取締役 川越一磨 氏
猫株式会社 代表取締役 小林一樹 氏
・ファシリテーター
一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン 事務局長 戸田達昭 氏

第4回「家族視点から考える新しい事業承継の取組み

～『承継学』を考える～

開催日時：令和3年10月25日（月）16：30～18：00

内容：「家族視点」を取り入れた新しい事業承継のあり方について、新しい「承継学」の観点からご講演いただく。この承継学に則って親族承継をベースにした事業承継の準備を進めておられる現役経営者から新しい事業継承の仕方を学ぶ。

登壇者：・講師 株式会社kamakura kazoku 代表取締役CEO 関尚子 氏
取締役CHO 関清一郎 氏
鎌倉総合会計事務所公認会計士 合同会社SANTI 代表 松本純 氏
・特別ゲスト 株式会社ベル 代表取締役 奥斗志雄 氏
・ファシリテーター
一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン 理事 廣川克也 氏

第5回「ビジネスプランコンテスト 参加学生の意欲と進捗」

開催日時：令和3年11月29日（月）16：30～18：00

内容：学生でありながらビジネスプランコンテストに参加しようと考え、行動に至ったか、コンテスト参加前後の意識や環境の変化、どのような取り組みを進めているのかを学ぶ。

登壇者：・ゲスト 山梨大学 飛田 仰喜 氏
山梨県立大学 笹井 のの 氏
山梨学院大学 初崎 里桜 氏
・ファシリテーター
一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン 事務局長 戸田達昭 氏

第6回「起業1年目、基盤づくりのための支援制度の活用方法」

開催日時：令和3年12月27日（月）16：30～18：00

内容：山梨県では、これから起業する人へ向けた支援制度が充実している。やまなし地域課題解決型起業支援金を活用した起業家の方々のこの1年での進捗状況や、起業支援金を実際に利用した用途についてお話から学ぶ。

登壇者：・講師 バウエス株式会社 掛本啓太 氏
古谷葡萄園 古谷崇 氏
山梨県成長産業推進課 中島光紘 氏
・ファシリテーター
一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン 事務局長 戸田達昭 氏



第7回「『やまなし WineTech Valley 構想』について」

開催日時：令和4年1月31日（月）16：30～18：00

内容：「ワイン県」の山梨は、ワイン生産地としての Wine Valley としてのみならず、ワイン生産に関わる様々な技術が集積している"WineTech" Valley として期待されます。

山梨大学ワイン科学研究センターを始め、約80のワイナリーにおける生産者及び関係者に加え、半導体やモノづくり関連の企業など、ワイン生産関連での山梨の技術のポテンシャルを浮かび上がらせるとともに、そのビジネスの可能性の検討を進めていくという「やまなし WineTech Valley 構想」について、活発に議論し学ぶ。

登壇者：・講師 山梨大学 ワイン科学研究センター センター長: 奥田 徹 氏
株式会社 ルミエール 代表取締役社長: 木田 茂樹 氏
山梨県関係者
・ファシリテーター
一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン 理事 潮 尚之 氏

第8回「山梨の未来を支える団体の考える今後の展望」



開催日時：令和4年2月28日（月）16：30～18：00

内容： 関東圏での新設法人設立数増加率で1位をマークするなど、近年、起業創業やアントレプレナー創出に勢いのある山梨県。それらのベンチャー企業や起業家をサポートする団体の活動も活発化しています。今後、山梨県から日本全国、ひいては世界を盛り上げるためには、これらの団体も協力関係を築いていく必要があるのではないのでしょうか。

最終回は、起業創業をサポートしている各団体にお集まりいただき、今後、協力関係を築き上げる中で、それぞれの強みを活かしてこれからの山梨の起業創業を盛り上げていくための工夫や、山梨の展望についてパネルディスカッションを行った。

登壇者：・パネリスト
一般社団法人 山梨県ニュービジネス協議会 会長 石坂正人 氏
一般社団法人 山梨イノベーションベース 代表理事 澤登拓 氏
一般社団法人 Mt.Fujiイノベーションエンジン 代表理事 岩崎甫 氏
・ファシリテーター
一般社団法人Mt.Fujiイノベーションエンジン 理事 廣川克也 氏

【第1回 特別授業】

【第2回 特別授業】

【第5回 特別授業】



1 1. アンケート調査・ヒアリング調査報告

1. アンケート調査の概要

(1) 調査の目的

本年度から実施する「VUCA 時代の成長戦略を支える実践教育プログラム」における受講生の満足度調査および学生のニーズ調査等を通じ、今年度のプログラム評価、課題の抽出を行い、次年度以降の改善、充実を図る。

(2) 調査方法

①「VUCA 時代の成長戦略を支える実践教育プログラム」受講生調査

カテゴリ	内容
対象	プログラム受講生（担当教員により実施）
設問数	11問（記述式回答を含む）
実施方法	オンライン、前期終了時に講義内で実施（QRコード読み込み）
調査期間	前期：科目終了後～令和3年8月31日 後期：科目終了後～令和4年2月28日

②学生に対するニーズ調査

カテゴリ	内容
対象	山梨県立大学、山梨大学、山梨英和大学の学生
設問数	13問（記述式回答を含む）
実施方法	各学部の講義内で実施（QRコード読み込み）
調査期間	令和3年7月末～令和3年9月中旬

(3) 回答結果

①「VUCA 時代の成長戦略を支える実践教育プログラム」受講生調査

受講者数 計……277人（前期・91人/後期・186人）
回収数 計……78件（前期・21件/後期・57件）

②学生に対するニーズ調査の回答者数

山梨県立大学……74名
山梨大学………115名
山梨英和大学……40名

(4) 報告書中の記号、調査結果の数値について

（S.A）…単一回答（Single Answer）の略。選択回答は1項目のみ。

（M.A）…複数回答（Multi Answer）の略。回答する選択肢の数に制限がある。

※ アンケート結果の数値は小数点第2位を四捨五入しており、単一回答であっても合計が100%にならない場合がある。

※ 複数回答の場合は合計値が100%にならない場合がある。

2. アンケート調査結果

(1) 「VUCA 時代の成長戦略を支える実践教育プログラム」受講生調査

問1 受講科目（自由記述）

受講科目（自由記述）



【組み合わせ集計（前期）】



- 前期は、「地域のチャレンジ1」の受講生が6割程度と最も多く、後期は「日本ワイン歴史マスタースター養成講座」の受講生が約4割と最も多い。
- 前期では、複数受講が多く、2講座もしくは3講座受講の存在が確認できたが、後期のアンケートでは、複数講座の受講はなかった。

問2：性別（SA）

性別（1つ選択）



- 全体、前期、後期ともに、受講者は男性より女性のほうが多くなっている。

問3：年齢（SA）

年齢（1つ選択）



- 全体では、20歳代の受講者が最も多く43.6%、次いで40歳代（26.9%）と見ている。
- 前期と後期で見ると、前期は20歳代の受講者が最も多く全体の6割半強であったが、後期は「20歳代」と「40歳代」の受講者が最も多く、それぞれ約3割半となっている。

5

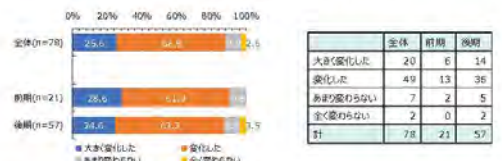
問4：講座を選んだ理由（SA）



- 全体、前期、後期ともに「興味・関心があった」が最も多くくなっている。
- 後期では、「これからの時代を生き抜くうえで必要だと感じた」も12.3%と1割強となっている。

問5：受講による考え方や価値観の変化（SA）

講座を受講したことで、あなたの考え方や価値観に変化がありましたか（1つ選択）



- 「大きく変化した」と「変化した」を合わせた「変化した」は、全体および前期、後期ともに9割前後となっている。

6

【クロス集計】問1：受講科目（自由記述）×問5：受講による考え方や価値観の変化（SA）



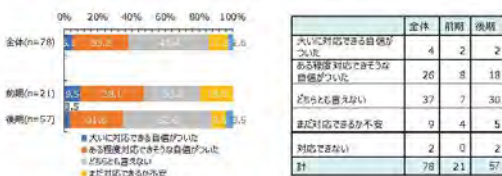
※「大きく変化した」と「変化した」を合わせて「変化した」と、「あまり変わらない」と「全く変わらない」を合わせて「変わらない」とで集計。

※前期・後期ともに各講座のサンプル数が少ないため参考値とする。

7

問7：講座を受けて VUCA 時代に対する自信がついたか（SA）

講座を受けて、VUCA 時代に対応している自信はつきりましたか（1つ選択）



- 全体と後期では「どちらとも言えない」が最も多く、それぞれ47.4%、52.6%となっている。
- 一方、前期では「ある程度対応できそうな自信がついた」が最も多く38.1%であった。

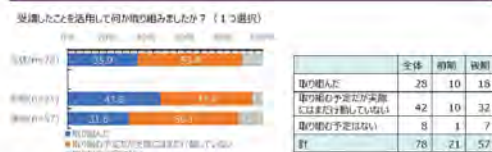
【クロス集計】問1：受講科目（自由記述）×問7：講座を受けて VUCA 時代に対する自信がついたか（SA）



※各講座のサンプル数が少ないため参考値とする。

13

図9：受講後の取り組みについて（SA）



- 全体および後期では、「取り組む予定だが実現にはまだ行動していない」がそれぞれ53.8%、56.1%と最も多くなっている。
- なお、前期と後期を比べると、前期のほうが「取り組んだ」が多くなっているが、統計上の有意差は見られなかった。

【クロス集計】図1：受講科目（自由記述）×図9：受講後の取り組みについて（SA）



※各講座のサンプル数が少ないため参考値とする。

○考察

【前期・後期の差】

前期、後期の回答による有意差は、すべての設問について認められなかった。

【年齢】

後期では、40歳代の回答者が増加したが、これは、市役所や町役場などの行政機関に周知したことや、「日本フィン歴史マイスター養成講座」への社会人受講者が多かったことによるものと考えられる。

ことから、周知方法や講座内容で、社会人にも強く訴求できると考えられる。

【受講理由】

興味や関心による受講が多く、目的意識を持った人が受講していることが分かる。オンラインやパンフレット等による講座案内の発信が功を奏していることがうかがえる。

【受講による考え方や価値観の変化】

前期、後期ともに「大きく変化した」「変化した」を合わせて9割前後と、講座の目的が十分に達成されていると考えられる。

【受講による考え方や価値観の変化の理由】

価値観が変化した理由としては、実際に活動している方々やゲストスピーカーとして講義したことや、受講生同士によるディスカッションにより、多様な考えに触れる機会が得られたことによるものが多い。一方、「変わらない」理由としては、講座内容が価値観の変化を見込めるものより、知識を深める内容であったことが大きいと考えられる。

【受講による自信】

全体としては「どちらとも言えない」が多く、意識や価値観の変化が、自信にまでつながるまでには至っていないと考えられる。

【受講で自信がついた理由、つかない理由】

自信がついた理由としては、人とのつながりや、講師の言葉により、自ら行動するきっかけにつながったことが影響していると考えられる。一方で、「どちらとも言えない」や「まだ対応できる不安」とした人は、理解が十分に深まらなかったり、理解はしても実際に自ら動くことに不安が残っている面がうかがえる。

実際の行動につながるまでのフォローの検討も求められる。

【受講後の実際の取組】

行った取組内容としては、組織の立ち上げや、現地視察、仕事への取り入れなどの活動から、受講での学びを意識した行動などがみられる。

一方、まだ取り組んでいない理由としては、新型コロナウイルスにより取組が難しいといった環境によるものや、実際に何に取り組むべきか分からないといった、具体的な取り組み方を模索している様子が見える。

また、就職活動中であったり、仕事に忙しいといった時間による理由も見受けられる。

【要望】

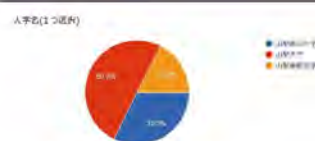
対面講義を希望する意見が多くなっている。

また、講義のアーカイブや資料のデータ化など、デジタルコンテンツの充実を求める声も多い。

日程が合わずに受講を断念したケースもあり、開講時間や曜日についても検討することが望ましい。

（2）学生に対するニーズ調査

図1：大学名（SA）



- 山梨大学の学生からの回答が半数を占めている。

図2：学部（自由記述）

山梨大	工学部	55
	生命環境学部	23
	大学部（理工系総合教育学部、ICPE、その他）	22
	教育学部	8
	医学部	7
計		115
山梨県立大	国際政策学部	40
	看護学部	18
	人間福祉学部	15
	その他（分科不明）	1
	計	74
山梨学院大	人間文化学部	39
	その他（分科不明）	1
計		40

- 山梨大では工学部、山梨県立大では国際政策学部が最も多く回答している。

問3：学年（SA）

学年（1つ選択）

229件の回答



- 1年生が最も多く、半年を過ぎるにつれて回答数が少なくなっている。

問4：性別（SA）

性別（1つ選択）

228件の回答



- 女性の回答が男性よりやや多くなっている。

32

問5：VUCA時代に対する認識（SA）

VUCAと聞かれる今の時代はどのような時代だと思いますか（1つ選択）

229件の回答



- 「ポジティブに捉えている」、「どちらかと言えばポジティブに捉えている」の合計が過半数を超えており、VUCA時代をポジティブに捉えている学生の方が多い。

【クロス集計】問1：大学名（SA）×問5：VUCA時代に対する認識（SA）

※本報告でグラフ化

	集計	ポジティブ派	ネガティブ派
総計	100.0	58.5	41.5
山梨県立大	100.0	63.5	36.5
山梨大	100.0	57.4	42.6
山梨英科大	100.0	52.5	47.5

- 大学別にVUCAの時代の捉え方を確認したところ、すべての大学で「ポジティブに捉えている」と「どちらかと言えばポジティブに捉えている」を合わせた「ポジティブ派」（以降、「ポジティブ派」とする）が5割を超えている。

33

問6：ポジティブに捉えている理由（SA）

（5で1及び4と回答した人＝ポジティブに捉えている人）そのように捉えている理由は何ですか（1つ選択）

134件の回答



- 「先が見えないからこそ、今までにない取り組みができそうだから」が最も多く、次いで「社会の変化に合わせて、自分自身も変えるチャンスがあるため」になっている。

問7：ネガティブに捉えている理由（SA）

（5で3及び4と回答した人＝ネガティブに捉えている人）そのように捉えている理由は何ですか（1つ選択）

98件の回答



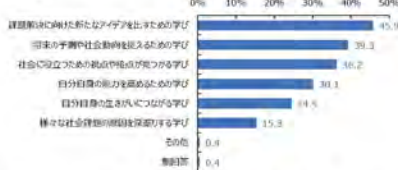
- 「予測不能なことが起き、社会がどうなるかわからず不安なため」が最も多く4割を超えている。次いで「自分の将来ビジョンをどう描けばいいかわからないため」になっている。

34

問8：VUCA時代に学生が必要とする学び（MA）

VUCA時代において、必要な学びはどのような学びだと思いますか（2つまで選択）

228件の回答



- 「課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び」が最も多く、次いで「将来の予測や社会動向を捉えるための学び」が続いている。

【クロス集計】問5：VUCA時代に対する認識（SA）×問8：VUCA時代に学生が必要とする学び（MA）

	1. 課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び	2. 将来の予測や社会動向を捉えるための学び	3. 社会に自立するための能力や価値を身につけるための学び	4. 自分自身の生きかたについて学ぶ	5. 様々な社会課題の解決に取り組むための学び	その他	選択なし
総計	38.3	45.9	36.2	15.3	24.5	30.1	0.4
ポジティブ派	32.1	51.5	35.8	22.4	21.6	26.9	0.7
ネガティブ派	49.5	37.9	36.8	5.3	28.4	34.7	0.0

- ＜ポジティブ派＞は「課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び」のニーズが最も多く、＜ネガティブ派＞は「将来の予測や社会動向を捉えるための学び」のニーズが最も多くになっている。

35

【クロス集計】問1 大学（SA）×問8 VUCA時代に学生が必要とする学び（MA）

	将来の予測や社会動向を捉えるための学び	課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び	社会の急変に対応するための学び	様々な社会課題を認識し、課題解決に向けた学び	自分自身の能力を高めるための学び	自分自身の能力を高めるための学び	その他	無回答
総計	39.3	45.9	36.2	15.3	24.5	30.1	0.4	0.4
山梨大(n=15)	40.7	40.0	39.1	13.3	25.2	24.3	0.0	0.0
山梨英和(n=74)	32.4	51.4	29.7	18.9	18.9	40.5	0.0	1.4
山梨英和(n=40)	32.5	50.0	40.0	12.5	32.5	27.5	0.0	0.0

- 大学別では、山梨大は「将来の予測や社会動向を捉えるための学び」のニーズが最も多く、山梨英和と山梨英和では「課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び」のニーズが最も多くになっている。

【クロス集計】問2 学部（SA）×問8 VUCA時代に学生が必要とする学び（MA）

	将来の予測や社会動向を捉えるための学び	課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び	社会の急変に対応するための学び	様々な社会課題を認識し、課題解決に向けた学び	自分自身の能力を高めるための学び	自分自身の能力を高めるための学び	その他	無回答
総計	39.3	45.9	36.2	15.3	24.5	30.1	0.4	0.4
山梨大								
工学部(n=59)	40.7	54.2	33.9	8.5	20.3	27.1	0.0	0.0
生命環境学部(n=24)	53.2	33.3	41.7	16.7	29.2	16.7	0.0	0.0
教育学部(n=8)	75.0	12.5	50.0	0.0	25.0	37.5	0.0	0.0
医学部(n=7)	71.4	14.3	71.4	14.3	0.0	14.3	14.3	0.0
大学院(n=17)	29.4	29.4	29.4	35.3	67.1	42.5	0.0	0.0
山梨英和								
国際政策学部(n=40)	27.5	30.0	20.0	10.0	20.0	47.5	0.0	2.5
看護学部(n=18)	33.3	38.9	44.4	22.2	16.7	44.4	0.0	0.0
人間福祉学部(n=15)	40.0	40.0	40.0	40.0	20.0	20.0	0.0	0.0
その他(分類不明)(n=1)	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

38

- 学部別にみると、山梨大では工学部で「課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び」が最も多く、生命環境学部、教育学部、医学部で「将来の予測や社会動向を捉えるための学び」が最も多くになっている。なお、医学部は「社会に役立つための視点や視点が見つかる学び」も同様で最も多く、大学院では「自分自身の生きがいにつながる学び」が最も多くになっている。
- 山梨英和では、国際政策学部で「課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び」が最も多く、看護学部では「社会に役立つための視点や視点が見つかる学び」、「自分自身の能力を高めるための学び」の2つが、人間福祉学部で「将来の予測や社会動向を捉えるための学び」、「課題解決に向けた新たなアイデアを出すための学び」、「社会に役立つための視点や視点が見つかる学び」、「様々な社会課題の要因を深掘りする学び」の4つが最も多くになっている。

※山梨英和の「その他」はサンプル数が1のため参考値とする。

37

問9 VUCA時代を生き抜くために必要となるもの（MA）

VUCA時代を生き抜くためには、自分自身が必要と感じますが（2つまで選択）

229件の回答



- 「社会の変化に対応できるしなやかさがあること」が最も多く、6割を超えている。次いで「どんな状況にも対応できるマインドを持つこと」が5割と続いている。

【クロス集計】問5 VUCA時代に対する認識（SA）×問9 VUCA時代を生き抜くために必要となるもの（MA）

	社会の変化に対応できるしなやかさがあること	どんな状況にも対応できるマインドを持つこと	いろいろな人とのつながり（人間）があること	社会によって何が正しいのかを判断できること	高い専門性があること	多くの資格を所有すること	その他	無回答
総計	51.5	33.2	37.6	17.9	11.8	6.3	1.3	0.4
山梨大	51.5	33.2	44.8	11.2	6.0	6.4	1.4	0.0
山梨英和	51.6	33.4	27.4	12.6	6.0	5.0	0.0	1.1

- ＜ネガティブ派＞も、＜ネガティブ派＞ともに「社会の変化に対応できるしなやかさがあること」が最も多く、「多くの資格を所有すること」は＜ネガティブ派＞も、＜ネガティブ派＞ともに最も少なくなっている。

38

【クロス集計】問1 大学（SA）×問9 VUCA時代を生き抜くために必要となるもの（MA）

	社会の変化に対応できるしなやかさがあること	どんな状況にも対応できるマインドを持つこと	いろいろな人とのつながり（人間）があること	社会によって何が正しいのかを判断できること	高い専門性があること	多くの資格を所有すること	その他	無回答
総計	51.5	33.2	37.6	17.9	11.8	6.3	1.3	0.4
山梨大(n=15)	60.0	5.2	37.4	11.3	61.7	14.8	1.7	0.0
山梨英和(n=74)	44.6	8.1	36.5	14.9	36.2	21.6	1.4	0.0
山梨英和(n=40)	40.0	17.5	40.0	7.5	67.5	20.0	0.0	2.5

- 大学別では、すべての大学で「社会の変化に対応できるしなやかさがあること」のニーズが最も多くになっている。

【クロス集計】問2 学部（SA）×問9 VUCA時代を生き抜くために必要となるもの（MA）

	社会の変化に対応できるしなやかさがあること	どんな状況にも対応できるマインドを持つこと	いろいろな人とのつながり（人間）があること	社会によって何が正しいのかを判断できること	高い専門性があること	多くの資格を所有すること	その他	無回答
総計	51.5	33.2	37.6	17.9	11.8	6.3	1.3	0.4
山梨大								
工学部(n=59)	11.0	2.2	10.0	2.6	17.0	3.9	0.4	0.0
生命環境学部(n=24)	41.7	0.4	3.1	0.9	7.0	0.0	0.0	0.0
教育学部(n=8)	25.0	0.0	1.3	0.0	1.7	0.4	0.0	0.0
医学部(n=7)	28.6	0.0	0.4	0.4	2.9	0.0	0.0	0.0
大学院(n=17)	5.9	0.0	3.9	0.9	3.1	1.3	0.4	0.0
山梨英和								
国際政策学部(n=40)	1.0	0.0	5.2	2.6	13.1	3.9	0.0	0.0
看護学部(n=18)	3.0	0.0	3.9	0.9	1.9	2.2	0.0	0.0
人間福祉学部(n=15)	2.0	1.3	2.6	1.3	3.5	0.0	0.0	0.0
その他(分類不明)(n=1)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

- 学部別にみると、山梨大では工学部で「社会の変化に対応できるしなやかさがあること」が最も多く、生命環境学部、教育学部、医学部、大学院で「どんな状況にも対応できるマインドを持つこと」が最も多くになっている。なお、医学部は「社会の変化に対応できるしなやかさがあること」も同様で最も多くになっている。
- 山梨英和では、国際政策学部、看護学部、人間福祉学部で「社会の変化に対応できるしなやかさがあること」が最も多くになっている。

※山梨英和の「その他」はサンプル数が1のため参考値とする。

39

問10：あたい自分になるために受けた講座 (MA)

あたい自分になるために受けた講座を受けてみたいと思う講座 (2つまで選択)
229件(割合)



- 「様々な活動や生き方を紹介してくれる講座」が最も多く、次いで「自分の興味のある分野の専門家が話してくれる講座」と続いており、いろいろな人の意見（視点）を聞く形の講座のニーズが高くなっている。

【クロス集計】問5：VUCA時代に対する認識 (SA) × 問10：あたい自分になるために受けた講座 (MA)

	様々な活動や生き方を紹介してくれる講座	自分の興味のある分野の専門家が話してくれる講座	社会課題の解決に向けた方法論や企画立案が学べる講座	ワークショップや実践などアクティブラーニングで学べる講座	実際に地域活動等の参加ができる講座	その他	無回答	計
総計	58.1	36.2	11.8	29.7	32.8	18.3	2.2	100.0
ポジティブ派	55.2	30.6	13.4	35.1	35.1	18.7	3.0	100.0
ネガティブ派	62.1	44.2	9.5	22.1	29.5	17.9	1.1	100.0

- <ポジティブ派>も<ネガティブ派>ともに「様々な活動や生き方を紹介してくれる講座」が最も多く選んでいる。
- 2番目に多かったものについては、<ポジティブ派>は「ワークショップや実践などアクティブラーニングで学べる講座」「社会課題の解決に向けた方法論や企画立案が学べる講座」で、双方向の・実践的な講座ニーズが高いのに対し、<ネガティブ派>は「自分の興味のある分野の専門家が話してくれる講座」と聴講形式のニーズが高くなっている。

40

【クロス集計】問1：大半 (SA) × 問10：あたい自分になるために受けた講座 (MA)

	様々な活動や生き方を紹介してくれる講座	自分の興味のある分野の専門家が話してくれる講座	社会課題の解決に向けた方法論や企画立案が学べる講座	ワークショップや実践などアクティブラーニングで学べる講座	実際に地域活動等の参加ができる講座	その他	無回答
総計	58.1	36.2	11.8	29.7	32.8	18.3	2.2
山梨大(n=115)	56.5	40.9	15.7	24.3	32.2	20.9	0.9
山梨県立大(n=74)	52.7	23.0	10.8	35.1	35.1	18.9	5.4
山梨県和太(n=40)	72.5	47.5	2.5	35.0	30.0	10.0	0.0

- 大半別では、すべての大学で「様々な活動や生き方を紹介してくれる講座」のニーズが最も高くなっている。

【クロス集計】問2：半数 (SA) × 問10：あたい自分になるために受けた講座 (MA)

	様々な活動や生き方を紹介してくれる講座	自分の興味のある分野の専門家が話してくれる講座	社会課題の解決に向けた方法論や企画立案が学べる講座	ワークショップや実践などアクティブラーニングで学べる講座	実際に地域活動等の参加ができる講座	その他	無回答
総計	58.1	36.2	11.8	29.7	32.8	18.3	2.2
工学部(n=59)	52.5	32.2	11.9	28.8	27.1	32.2	0.0
生命環境学部(n=24)	66.7	54.2	20.8	12.5	20.8	20.8	0.0
教育学部(n=8)	62.5	12.5	25.0	37.5	25.0	12.5	0.0
医学部(n=7)	42.9	28.6	0.0	71.4	28.6	14.3	0.0
法学部(n=17)	35.3	23.5	5.9	47.1	58.8	5.9	5.9
国際政策学部(n=40)	72.5	37.5	15.0	27.5	40.0	5.0	0.0
看護学部(n=18)	61.1	22.2	11.1	27.8	27.8	22.2	5.6
人間福祉学部(n=15)	83.3	66.7	6.7	26.7	26.7	20.0	0.0
その他(分類不能)(n=1)	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0

- 学部別にみると、山梨大では工学部、生命環境学部、教育学部で「様々な活動や生き方を紹介してくれる講座」のニーズが最も多く、医学部で「ワークショップや実践などアクティブラーニングで学べる講座」、大学院で「社会課題の解決に向けた方法論や企画立案が学べる講座」が最も高くなっている。

- 山梨県立大では、国際政策学部、看護学部、人間福祉学部で「様々な活動や生き方を紹介してくれる講座」のニーズが最も高くなっている。また、人間福祉学部では「自分の興味のある分野の専門家が話してくれる講座」も同様に最も高くなっている。

※山梨県立大の「その他」はサンプル数が1のため参考値とする。

41

問11：学生が関心・興味のある分野 (SA)

あなた自身が関心・興味のある分野を教えてください (1つ選択)
(267件割合)



- 関心・興味のある分野は「地域づくり・まちづくり」が最も多く、次いで「企業の経営革新・産業の活性化」となっている。

【クロス集計】問1：大半 (SA) × 問11：学生が関心・興味のある分野 (SA)

※本報告でグラフ化

	地域づくり・まちづくり	企業経営革新・産業の活性化	社会課題の解決	環境・自然・文化	国際化・多文化
総計	100.0	44.7	15.9	14.6	24.8
山梨県立大	100.0	47.9	19.2	17.8	15.1
山梨大	100.0	42.1	11.4	10.5	36.0
山梨県和太	100.0	46.2	23.1	20.5	10.3

- 大学別に学生が関心・興味のある分野を見ると、すべての大学で「地域づくり・まちづくり」が最も多く選んでいる。2番目に関心・興味のある分野については、山梨県立大と山梨大は「社会課題の解決」を使用した観念の割合で、山梨大は「企業の経営革新・産業の活性化」となっている。

42

〇考察

【VUCAの時代に対する認識】

VUCA 時代をポジティブに捉えている学生が比較的多い状況が見て取れる。その中で、必要とする学びについては社会課題に対して積極的にアプローチしていく方法を選択する学生が多く、自身の能力 UP や生きがいについての学びを選ぶ学生よりも割合が高かった。

一方で、「社会課題の原因について深堀する学び」を選んだ学生が最も少なかったが、原因と解決のためのアイデアは必要としている部分であるため、学生に対しては、課題の深堀と解決のつながりで示唆できる講座の組み立てが望ましいと考えられる。

【VUCAの時代を生き抜くために必要となるもの】

社会の変化への対応力やそのためのマインドを選ぶ学生が多く、次いで人とのつながりを選ぶ学生が多かった。変化が急速で新しい世の中において、その変化に対応していくための力やマインドを必要としていることが認識できたため、(VUCA 時代の成長戦略を変える実践教育プログラム)を各大学に広く周知し、ニーズに応える形とすることが望ましい。

また、人とのつながりについては、学生同士だけでなく、実際に活動している人との視点についてのニーズも高く、講座科目である地域のチャレンジャーは学生ニーズが反映された講座として捉えることができる。受講後も関係性が継続できるような形となればさらに効果的だと考えられる。

【関心・興味のある分野】

「地域づくり・まちづくり」が最も多く、次いで「企業の経営革新・産業の活性化」となっている。学びたいものとして方法論や考え方を求める学生が多くなっているが、工学部などではハード面や技術に関するものへの関心が高い学生が多く見られる。

今後の講座では、方法論や考え方のプロセスを重点的に学ぶことができる講座と、関心・興味のある分野で、役に立つツールなどを実際に作り上げる工程を体験できる形の講座などが望ましいと考えられる。

【受講の機に希望すること】

体験講座に関心することを希望する受講者が多かった。また多面的・多角的なものの見方や考え方へのニーズが高いことも見受けられる。

講座の開催形式については、コロナ禍の影響もありオンラインでの開催を希望する意見が多かったが、対面形式による意見交換やワークショップ、フィールドワークの実践を望む意見もあり、開催方法については引き続き工夫が必要だと考えられる。また、受講しやすさに関する意見も多く、土日開催や動画配信などの要望も出されている。

53

講座科目である「地域のチャレンジ」のように体験を聞くことができる講座や、多面的なものの見方を学ぶことができる講座が、学生のニーズを反映させた講座となる。またオンラインでの開催形式をとりつつも、意見交換やワークショップなどを促す双方向的なシステムを利用することも妥当だと考えられる。また受講しやすい確保については、Zoomの録画機能を活用したアーカイブの作成なども考えられるが、その場合オンライン上での動画の管理するかなどについて、別途検討が必要になると考えられる。

54

(1) ヒアリング調査報告

調査概要

目的	VUCA時代の「カレント講座」に対し、講座に必要な視点、修正が必要な事項を確認する。
対象者	企業・団体：3件/自治体（地域おこし協力隊）：2件/受講者：2人 合計7件（人）
実施時期	令和3年8月27日（金）～9月10日（金）
実施方法	オンラインまたは対面

ヒアリング調査結果（概要）

企業・団体等

企業（3件）からは、昨年度実施した「カレント講座 企業アンケート」を元に、回答内容の詳細について確認する形で実施した。社会的課題解決に取り組むにあたっての課題について、「人的資源」や「資金」等と回答していた企業に具体的に聞いたところ、実際には人的資源や資金だけの問題ではなく、単体で実施するには限界があり、さまざまな分野からの知恵や能力が必要だと考えていることが分かった。また、多様な「他」どの関わりによって、経営者が抱えこんだ時代をどう生きて行けばよいと議論する必要があると認識している面なども見受けられた。

一方で、企業の内部環境を改善することで従業員の働きが良くなること、企業収益を上げることにより、寄付などを通じて社会貢献といった外への影響力を高めるなど、自社が発展・繁栄すること自体が社会課題解決につながるという考えの企業もあった。

また、取り組む分野については、ヒアリングしたすべての企業が地域防災、マイノリティ（外国人、障害者等を含む多様性）を重要視する傾向がうかがえた。

地域おこし協力隊、自治体職員と地域おこし協力隊では、取り組みの目的が明確になっているため、特産品による町の活性化や「情報発信による町の活性化」など、より専門的な知識を得て、地域に還元していく必要性を感じている傾向が見られた。

受講者

社会人受講者2人は、以前から地域課題に問題意識を持ち、何かに取り組みたいと考えている人であった。自らが活動することで他に影響をおよぼし課題解決につながるという面が見られ、その考えや、手法について学ぶ機会となり、地域の課題解決だけでなく、仕事でも活かせる内容として価値につながっている様子が伺われた。一方で、「どれも受けた講座だった」といふほど、すべての講座に興味を

55

を示しているが、最も関心した講座がどれなのかを明確で具体的時間があるものを選んで様子もうかがえたため、「講座選択に迷った」といった、講座選択がガイド役にも有用であると考えられる。

「あるべき姿に導かれず気づき放ったことで今の取組につながっている」とした受講者の1人は、VUCAの時代に形式知外の教科書通りにいかない「何か」を講座で伝えていくことが重要だとし、さまざまな人が個人の体験談を元に地域づくりについて深く講義を受講したことでその有用性を再認識できたと様子うかがえた。また、それぞれの話を聞くことで地域性、地域産が理解できる利点についても確認し、やろうとしていたことが間違っていたりなかったことの裏付けとなった様子であった。一方で、他と連携しながら課題解決に取り組む学びに対しては、自身のこれまでの経験から、積極的ではなく、他の活動が他にな作用する形で取組を推進していく姿勢が見られた。

両者ともに社会人という立場から、時間の調整がつかずに全講義の出席が不可能となり、1講座のみの受講に限定されるなどの不都合が生じており、受講者限定のアーカイブ配信、夜間や土日の開催などの検討をする必要性が感じられる。

地域おこし協力隊

社会的課題の解決に向けた要望については、特産物栽培で地域の活性化に取り組む地域では、他との関わりが必要な活動内容であることもあり、過疎化や耕作放棄地などに対して周囲との連携や、地域に提案していく姿勢が必要であると認識しているのに対し、情報発信による活性化に取り組む地域では、個人での活動がメインとなるため、個人のスキルアップを重視する傾向が見られた。

一方で、その地の歴史、土地の成り立ちなど地域の背景を学ぶ重要性は両者に共通している部分であった。また、どちらも、地域づくりの成功例（地域おこし協力隊の成功例）を聞くことにより、取り入れていきたいとの要望があるのとともに、自治体職員の異動による分断に問題意識を持っていることが分かった。

自治体としての地域おこし協力隊への要望は、地域性や他と課題を理解していることであり、地域理解の有無によって、その後の活動やその他への定着に影響があると考えていることから、地域の理解を促す講座に対する要望が多かった。また、都市農村と活動や問題を共有する場を求める意見もあった。

56

まとめ

今回のヒアリング結果から、「社会（地域）課題解決」において、取組に対する姿勢（意識）に差が見られたことから、「社会（地域）課題解決」においての意識を以下の3つに分類した。

- 1:「社会的アクション層」
社会的発展を目的に連携していくことで社会課題解決を図る必要があると考える層
- 2:「自社（自己）重視層」
自社（自己）の充実（発展）が社会に影響を与えることで社会課題解決につながると考える層
- 3:「コミュニティ重視層」
それぞれが個別にコミュニティに対して取組むことで社会の発展につなげるよう考える層

「社会的アクション層」については、VUCAの時代に対し、他との意見を幅広く聞く機会や他と協働する機会の醸成を求める傾向にあり、「コミュニティ重視層」については、専門的スキルと他との連携の機会、「自社（自己）重視層」については、個々のスキルアップ機会を求める傾向がみられる。



図1 ヒアリング対象者の分類

57

12. 会議実施一覧

日付	名称	主な内容
R3.4.27	第1回プログラム検討委員会	令和3年度の教育課程表、開講スケジュールの審議
R3.5.12	第1回事業実施委員会	令和3年度の教育課程表、開講スケジュール、事業評価委員の審議
R3.6.3	事業評価委員会	(詳細について別途報告)
R3.7.8	第2回事業実施委員会	令和3年度後期開講科目の審議、各プログラムの進捗状況の報告
R3.9.30	教育プログラム別分科会 (観光、地域)	令和4年度に向けたプログラムの検討、COC+R推進体制の検討状況の報告
R3.10.14	教育プログラム別分科会 (経営)	令和4年度に向けたプログラムの検討、COC+R推進体制の検討状況の報告
R3.10.15	教育プログラム別分科会 (多文化)	令和4年度に向けたプログラムの検討、COC+R推進体制の検討状況の報告
R3.12.7	第3回事業実施委員会	令和4年度の教育課程表の審議、令和3年度受講者のアンケート調査に関する分析の報告
R4.2.2	第4回事業実施委員会	令和4年度以降の実施体制、規程の改正等、令和4年度の各プログラム教育課程表、令和4年度の事業計画について審議
R4.2.10	令和3年度 地方創生人材教育協議会	令和4年度以降の事業実施体制、規程の改正等、令和4年度の各プログラム教育過程表、令和4年度の事業実施計画の審議
R4.2.10	第2回プログラム検討委員会	非常勤講師の採用、カリキュラムツリーの作成、高等学校等に在学する者に関する科目等履修生の募集の審議
R4.3.23	第3回プログラム検討委員会	令和4年度高等学校等に在学する者に関する科目等履修生の選考、非常勤講師の採用の審議

令和2年度 事業評価委員会（令和3年6月3日開催）

事業評価委員会は、本事業の取組状況を報告し進捗について評価を頂くとともに、学術、報道、労働及び雇用の各分野から、本事業が直面する課題の解決に向けた助言や提言などを頂くことで、今後の計画内容の見直しや取組の強化を図ることを目的として設置し、令和3年6月3日に令和2年度の事業評価委員会を開催した。

杉森委員長より、「本事業の成功には、多様な連携協働機関とのネットワークが重要となっている。今後、実態を伴った事業遂行を行うために、大学内外への効果波及をより進められるように実施体制の強化にあたってほしい。また令和3年度からは、教育プログラムの本格的な実施がなされていることから、受講者の状況や学習成果を適時アセスメントし、事業の改善に活かしていくことが望まれる。」と総括頂いた。

1. 日 時：令和3年6月3日（木）10:00～12:00
2. 場 所：山梨県立大学飯田キャンパス A館2階大会議室（Zoomオンラインによる併用）
3. 評価委員：北陸大学高等教育推進センター センター長・教授 杉森公一 氏（事業評価委員会委員長）
国際基督教大学 理事評議員・名誉教授女子学院前院長 風間晴子 氏
株式会社テレビ山梨 代表取締役社長 原田由起彦 氏
株式会社クア・アンド・ホテル 代表取締役社長 三森中 氏
桐朋学園大学 音楽学部 特任教授 八巻和彦 氏



令和3年度 地方創生人材教育協議会（令和4年2月10日開催）

本協議会では、令和2年度の事業評価委員会の総括、文部科学省との意見交換等の報告及び、令和4年度にむけた実施体制、規程の改正等についての審議が行われました。コロナ禍のため、令和3年度の地方創生人材教育委員会はオンラインでの開催となった。

1. 日 時：令和4年2月10日（木）10:30～12:00
2. 場 所：オンライン開催（主拠点 山梨県立大学 飯田キャンパス 大会議室）
3. 出席委員：地方創生機構長（議長） 早川 正幸、山梨大学 学長 島田 眞路、山梨英和大学 学長 朴 憲郁、（公財）山梨総合研究所 理事長 今井 久、（公財）やまなし産業支援機構 理事長 手塚 伸、（公社）やまなし観光推進機構 理事長 仲田 道弘、株式会社タンザワ 顧問 堀内 久雄（兼務 プロジェクトコーディネータ）、萌木の村株式会社 代表取締役社長 船木 上次（兼務 エグゼクティブコーディネータ）、昭和産業株式会社 代表取締役社長 岩下 和彦、山梨県県民生活部私学・科学振興課 課長 小林 洋一（代理出席）、地方創生副機構長 相原 正志、教育プログラム長 杉山 歩、山梨県立大学 国際政策学部長 熊谷 隆一、山梨県立大学 人間福祉学部長 高野 牧子、山梨県立大学 看護学部長 名取 初美、地域研究交流センター長 安達 義通（兼務 国際教育研究センター長）、教育委員長 箕浦 一哉、山梨県立大学 事務局長 保坂 陽一、山梨県立大学 事務局次長 塚原 理宏
4. 報告事項
 - （1）令和3年度の事業実施状況について
 - （2）令和2年度事業評価委員会について
 - （3）文部科学省との意見交換について
 - （4）文部科学省の視察について
5. 審議事項
 - （1）令和4年度以降の事業実施体制について
 - （2）規程の改正等について
 - （3）令和4年度の各プログラム教育過程表について
 - （4）令和4年度の事業計画について

1 3. 多文化共生人材育成プログラムキックオフシンポジウム開催

令和4年3月26日に、令和4年度開講 新プログラム「多文化共生対応人材育成プログラム」のキックオフシンポジウムを開催し、当日は対面33名、オンライン48名の方が参加した。

- (1) 日 時 令和4年3月26日(土) 13:30~17:00
 (2) 場 所 山梨県立大学池田キャンパス(甲府市池田1-6-1)
 アクティブラーニング教室(旧L.L.) ※対面・オンライン(ハイブリッド)
 (3) 内 容

1990年改正入管法施行後、30年が経ちました。その間、地域は、外国人住民の急増によるこれまでにない課題に様々な対応を試みてきました。コロナ禍にあって外国人住民の増加は見られないものの顕在化した問題もあり、対応は現在進行形だと推察します。そういった多文化共生への対応とその課題を振り返って整理し、そして現前する諸課題を乗り越えるべく、今後のウィズコロナ、アフターコロナの多文化共生社会を登壇者とともに思い描きましょう。

【基調講演①】

テーマ:「人口激減時代へー在留外国人と日本の未来ー」

講師:毛受 敏浩氏(公益財団法人 日本国際交流センター執行理事)

【基調講演②】

テーマ:「多文化共生を阻む法や制度を乗り越えて希望の明日へ」

講師:山崎 俊二氏(山梨県外国人 인권 ネットワーク・オアシス代表)

【シンポジウム】

ファシリテーター

新居 みどり氏(NPO法人 国際活動市民中心CINGA理事・コーディネーター)
 シンポジスト

茂呂 哲也氏(株式会社 茂呂製作所代表取締役)

熊谷 信利氏(社会福祉法人 光風会統括施設長)

今澤 悌氏(文部科学省日本語指導アドバイザー・甲府市立大田小学校)

安達 研仁氏(社会福祉法人ぶどうの里理事)

コメンテーター

毛受 敏浩氏、山崎 俊二氏、長坂 香織(山梨県立大学看護学部教授)



04

令和4年度に向けての 取り組み

事業責任大学

1. 運営体制

- ・地方創生人材教育協議会を開催し、事業内容の確認・承認等を行う（年1回）
- ・事業実施委員会を開催し、教育プログラムの企画立案や協働機関との調整等を行う（年3回程度）
- ・教育プログラム別分科会を開催し、プログラムごとの検討を行う（随時）
- ・山梨県立大学地域人材養成センターを中心に、業務全体の運営を行う
- ・県が開設した「やまなし地域づくり交流センター」との連携強化を図る

2. 教育プログラムの準備・実施

- ・新設する3プログラムを含む5プログラムを実施する
- ・プログラムを構成する授業科目のうち可能なものを「大学コンソーシアムやまなし」の単位互換制度に登録し、県内6大学等※に提供する
※山梨大学、山梨学院大学、身延山大学、山梨英和大学、山梨学院短期大学、帝京学園短期大学
- ・プログラムを構成する授業科目のうち可能なものを連携開設科目として山梨大学に提供する
- ・プログラム実施に必要なシステムの保守を行う
- ・大学の規程を改正し、正規科目として全学共通科目に位置づける
- ・大学の規程を改正し、高等学校に在学する者の履修を可能とする

3. 情報発信

- ・ウェブサイトを活用し、活動状況の情報を発信する
- ・事業の周知等のためにイベントを開催する
- ・履修者募集のための冊子を作成・配布する
- ・企業や社会人等に向けた情報発信用の冊子を作成・配布する。
- ・年次報告書を作成し、ウェブサイト等で周知する

参加校

1. 事業実施委員会に参画する
2. 事業実施にあたって必要な学内体制の整備を行う
3. 開設されたプログラムの履修者の募集と必要な事務を行う

事業協働機関

1. 各機関は意思決定および企画立案のための各会議に参画する
2. 各機関は、講師依頼への対応及び教育プログラムの整備・充実に参画する
3. 社会人受講者の拡大のための情報発信等を協働して実施する
4. 大学と協力し、サーティフィケートの発行を実施する
5. 良質な雇用機会の拡大に取り組む
6. コストシェアの改善に取り組み事業継続の計画を具体化する

令和4年度開講プログラム紹介

令和3年度よりスタートしたPENTASYAMANASHIに、新たに「ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム」、「多文化共生対応人材育成プログラム」、「次代を担うアントレプレナー養成プログラム」が誕生いたしました。新たな学びの場が学生と社会人がつながりあうコミュニティとなるようお願い、令和4年度は5つのプログラムを開講いたします。

PENTAS YAMANASHI 5つの教育プログラム



各プログラムのVUCA科目、学部等開講科目(参加大学 学生のみ)、技能科目、実践科目より所定の単位数を取得した者に修了証が授与されます。修了要件は学生と社会人で異なります。

参加大学学生 18単位以上 (VUCA科目3単位、学部開講等科目8単位、技能科目3単位、実践科目4単位)

社会人等 10単位以上 (VUCA科目3単位、技能科目3単位、実践科目4単位)

※「次代を担うアントレプレナー養成プログラム」は、学部等開講科目はなく、学生・社会人ともに9単位以上を取得した者に修了証が授与されます。
※プログラム修了証は、事業協働機関とともに発行いたします。

各プログラム概要

観光高度化人材育成プログラム

地域資源の活用方法を学び観光の高度化を図ることができる人材を育成するとともに、新たな地域資源を対象に教育プログラム化し、実務家や専門家から本県の自然・歴史文化財の活用方法を学んでいきます。

- 地域資源を活用した先進事例の紹介
- ワイン県ならではのワイン関連科目
- 自然環境のマネタイズ手法を学び、自然文化からの価値創造を図る
- 観光業で活かせる語学力とホスピタリティマインドの醸成

地域づくり加速化人材育成プログラム

地域づくりの中心を担い、社会変革力の醸成を担う事ができる人材の養成し、更なる地域住民との交流・対話の場を設け、実践的な授業を展開していきます。

- 高い志をもった公務員の育成
- ハイレベルなコンピテンシーを身に付けた人材の育成
- 地域の課題を発掘する手法の習得
- 実践的な企画立案能力の醸成

ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム

県の基幹産業である製造業等において求められる人材を育成するため、実務家教員を最大限活用し、新規でビジネスを構想する力を養うとともに、経営マインドの醸成を図ります。

- 企業がチャレンジしている経営革新の紹介
- 事業計画の作成やイノベーション創生までの実践的手法
- 食を通じた地域経済への貢献手法
- トrend予測やブランディング等、ビジネス構想力の醸成

多文化共生対応人材育成プログラム

医療・福祉・教育の現場の国際化・多文化化の課題を理解し、解決するための方策を見出すことのできる人材を育成します。

- 多文化共生の現場を訪問
- 多様な背景をもつ人々とのコミュニケーション力の醸成
- 芸術をとおした多様な人々との協働の体験
- 多文化化する保健・医療・福祉現場で活躍できる人材育成

次代を担うアントレプレナー養成プログラム

自らの課題をビジネスの手法で解決する能力を養い、「起業家精神」を有する人材を養成するとともに、学生と社会人が相互に学び合い、新たな視点で事業を構想することのできる場を提供していきます。

- 起業家（実務家教員）による実践的な授業
- 世界で通用するビジネススキルの獲得（山形大学アントレプレナーシップ育成プログラムの活用）
- ビジネスプランコンテストへの出場とマルチステークホルダーによるメンタリング

令和4年度 教育課程表 観光高度化人材育成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ 1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ 2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	山梨学Ⅰ	選択	8単位 （学生のみ）	（全学共通）	2	講義	○	○
	山梨学Ⅱ	選択		（全学共通）	2	講義	○	○
	山梨の観光	選択		（国際政策）	2	講義		○
	文化とコミュニケーション	選択		（国際政策/全学共通）	2	講義	○	○
	日本の歴史	選択		（国際政策/全学共通）	2	講義	○	
	観光実務	選択		（国際政策）	2	講義		○
	山梨観光演習	選択		（国際政策）	1	演習		○
	海外インターンシップ	選択		（国際政策）	1	実習		○
	観光ビジネス論	選択		（国際政策）	2	講義		○
技能 科目	地域資源の保全と活用	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	料理とワインのマリアージュ	選択		1～4	1	講義	○	○
	まちづくりの思想と技術（旧：地域課題解決）	選択		1～4	2	講義	○	○
	ローカルガストロノミー論	選択		1～4	1	講義	○	○
実践 科目	ローカルデザイン実践演習（旧：地域課題解決演習）	選択	4単位	1～4	1	演習	○	○
	事業づくりの技法（旧：地域課題創造的解決演習）	選択		2～4	1	演習	○	○
	通訳入門実践	選択		1～4	1	演習	○	○
	実用中国語	選択		1～4	1	演習	○	○
	ネイチャーガイド演習 1	選択		1～4	1	演習	○	○
	ネイチャーガイド演習 2	選択		1～4	1	演習	○	○
	日本ワイン歴史マイスター養成講座	選択		1～4	1	講義	○	○
	おもてなしマイスター養成講座	選択		1～4	1	講義	○	○
	観光実践マネジメント講座	選択		1～4	1	講義	○	○
	やまなしワイン入門講座	選択		1～4	1	演習		○

令和4年度 教育課程表 地域づくり加速化人材育成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	地域プロジェクト論	選択	8単位 （学生のみ）	（国際政策）	2	講義		○
	環境社会学	選択		（国際-総合政策）	2	講義		○
	公共人材論	選択		（国際-総合政策）	2	講義		
	山梨の政策課題	選択		（国際-総合政策）	2	講義		○
	政策法務論	選択		（国際-総合政策）	2	講義		
	地域企業実践論	選択		（国際-総合政策）	2	講義		○
技能 科目	ワークショップデザイン（旧：コミュニケーション手法）	選択	3単位	1～4	2	講義	○	○
	まちづくりの思想と技術（旧：地域課題解決）	選択		1～4	2	講義	○	○
	情報発信の手法	選択		1～4	2	演習	○	○
実践 科目	事業づくりの技法（旧：地域課題創造的解決演習）	選択	4単位	2～4	1	演習	○	○
	政策づくりの技法（旧：地域づくり人材育成講座）	選択		2～4	1	演習	○	○
	ローカルデザイン実践演習（旧：地域課題解決演習）	選択		1～4	1	演習	○	○
	事業づくり実践演習（旧：地域づくり人材育成演習1）	選択		2～4	1	演習	○	○
	政策づくり実践演習（旧：地域づくり人材育成演習2）	選択		2～4	1	演習	○	○

令和4年度 教育課程表 ビジネス構想力・経営マインド醸成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ 1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ 2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	簿記論	選択	8単位 (学生のみ)	(国際政策/全学共通)	2	講義	○	○
	簿記演習	選択		(国際政策/全学共通)	1	演習	○	○
	経営学	選択		(国際政策)	2	講義		○
	経営組織論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	会計学	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	上級簿記	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	金融論	選択		(国際政策)	2	講義		
	地域企業実践論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	経営史／経営戦略論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	経営分析論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	マーケティング論	選択		(国際-総合政策)	2	講義		○
	国際経営論	選択		(国際政策)	2	講義		○
技能 科目	企業がチャレンジする経営革新	必修	3単位	1～4	1	講義	○	○
	ローカルガストロノミー論	選択		1～4	1	講義	○	○
	国際貿易実務	選択		1～4	1	講義	○	○
実践 科目	事業計画づくりワークショップ	選択	4単位	2～4	1	演習	○	○
	トレンド予測の手法	選択		1～4	1	演習	○	○
	イノベーション創造の基礎と実践	選択		2～4	1	演習	○	○
	ブランディング基礎と実践	選択		2～4	1	演習	○	○
	企業におけるレクチャーと現場研修	選択		1～4	1	演習	○	○

令和4年度 教育課程表 多文化共生対応人材育成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ 1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ 2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
学部等 開講科目	共生社会論	選択	8単位 (学生のみ)	(国際政策/全学共通)	2	講義	○	
	文化とコミュニケーション	選択		(国際政策/全学共通)	2	講義	○	○
	カウンセリング基礎	選択		(全学共通)	2	講義		
	未修外国語(中国語 I ab、スペイン語 I ab、韓国語 I ab、フランス語 I ab)	選択		(全学共通)	2	演習		
	留学英語	選択		(国際政策/全学共通)	1	演習		
	国際協力	選択		(看護/全学共通)	1	講義	○	
	看護英語	選択		(看護)	2	講義		
	医療英語 I	選択		(看護)	2	講義		
	医療英語 II	選択		(看護)	1	講義		
	国際看護学	選択		(看護)	2	講義		
	国際保健医療演習	選択		(看護)	2	演習		
	生・倫理・自立	選択		(人間福祉)	2	講義		
	子どもの人権	選択		(人間福祉)	2	講義		
	福祉と人権	選択		(人福-福祉コミュ)	2	講義		
	公的扶助論	選択		(人福-福祉コミュ)	2	講義		○
	ソーシャルワーク援助技術論Ⅲ	選択		(人福-福祉コミュ)	2	講義		
	多文化教育論（幼・小）	選択		(人福-人間形成)	2	講義		
	日本語教育概論	選択		(国際政策、 人福-人間形成)	2	講義		○
	日本語教育特講（外国籍児童生徒等）	選択		(国際政策、 人福-人間形成)	2	講義		○
	比較文化論(異文化理解)	選択		(国際政策)	2	講義		○
	日本語の表現Ⅱ（コミュニケーション）	選択		(国際-国際コミュ)	2	講義		○
	多文化教育論（中・高）	選択		(国際政策)	2	講義		
	福祉心理学	選択		(英和大学)	2	講義		○
	日本語教育概論	選択		(英和大学)	2	講義		
	宗教と思想	選択		(英和大学)	2	講義		
	多文化共生論	選択		(英和大学)	2	講義		
	子どもと文化	選択		(英和大学)	2	講義		
技能科目	多文化共生地域課題（多文化社会における対人援助／外国人と人権）	必修	3単位	2～4	2	講義	○	○
	多文化社会とことば	選択		1～4	1	講義	○	○
	保健医療福祉における文化理解	選択		2～4	1	講義	○	○
	地域課題解決（多文化共生）	選択		1～4	1	講義	○	○
実践科目	多文化共生サービスマーケティング	選択	4単位	2～4	2	演習	○	○
	芸術活動とおとした多様性協働プロジェクト	選択		1～4	2	演習	○	○
	多文化共生の現場を歩く	選択		1～4	1	演習	○	○
	地域課題プロジェクト（多文化共生イベント企画）	選択		1～4	1	演習		○
	多文化対応人材育成演習（教育）	選択		2～4	1	演習	○	○
	多文化対応人材育成演習（保健・医療・福祉）	選択		2～4	1	演習	○	○

令和4年度 教育課程表 次代を担うアントレプレナー養成プログラム

科目分類	科目名	選択/必修	最低必修 単位	配当 年次	単位数	授業 形式	連携開設 科目	コンソ 単位互換
VUCA 科目	VUCA時代のキャリアレジリエンス	必修	3単位	1～4	2	講義	○	○
	地域のチャレンジ 1	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域のチャレンジ 2	選択		1～4	1	講義	○	○
	グローバルマインドとスキル	選択		1～4	2	講義	○	○
	地域しごと概論（経営マインド）	選択		1～4	1	講義	○	○
	地域しごと概論（地域づくり）	選択		1～4	2	講義	○	○
	問題発見の技法（旧：提案書作成のためのスキル）	選択		1～4	1	演習	○	○
※学部等開講科目なし								
技能科目	アントレプレナーシップとスキル	選択	3単位	1～4	2	講義	○	○
	グローバルビジネススキル	選択		1～4	1	講義	○	○
実践科目	アイデア共創実践	選択	3単位	1～4	1	演習	○	○
	ビジネス共創実践	選択		1～4	2	演習	○	○

カリキュラムツリー

PENTAS YAMANASHI カリキュラムツリー

	5年プログラム共通科目	観光高度化人材育成プログラム	地域づくり推進化人材育成プログラム	ビジネス基礎力・経営マインド醸成プログラム	多文化共生対応人材育成プログラム	次代を担うアントレプレナー養成プログラム
応用 6000		・日本ワイン歴史 マイスター養成講座			・多文化対応人材育成 演習（保健・医療・福祉） ・多文化対応人材育成 演習（教育）	
基幹 （専門分野） 5000		・通訳入門実践 ・実用中国語	・ワークショップデザイン	・事業づくり実践演習 ・政策づくり実践演習	・国際貿易実務 ・企業におけるレクチャーと 現場研修	・保健医療福祉における 文化理解
基幹 （汎用） 4000	・地域しごと概論 （地域づくり） ・問題発見の技法	・地域資源の保全と活用 ・ローカルデザイン実践 演習		・ローカルデザイン実践 演習	・イノベーション創造の 基礎と実践 ・ブランディング基礎と 実践	・多文化共生地域課題 （多文化社会における対人 援助/外国人と人権） ・地域課題プロジェクト （多文化共生イベント企画）
基幹 （専門分野） 3000	・グローバルマインドと スキル ・地域しごと概論 （経営マインド）	・料理とワインの マリアージュ ・ローカルガストロノミー論	・事業づくりの技法 ・ネイチャーガイド演習 1 ・ネイチャーガイド演習 2	・情報発信の手法	・事業づくりの技法 ・政策づくりの技法	・ローカルガストロノミー論 ・トレンド予測の手法
基幹 （汎用） 2000	・VUCA時代の キャリアレジリエンス ・地域のチャレンジ 1 ・地域のチャレンジ 2	・まちづくりの思想と技術 ・おもてなしマスター 養成講座 ・観光実践マネジメント 講座	・まちづくりの思想と技術	・企業がチャレンジする 経営革新	・事業計画づくり ワークショップ	・地域課題解決 （多文化共生） ・芸術活動とおとした 多様性協働プロジェクト ・多文化共生の現場を歩く
入門 1000		・やさしいワイン入門講座				
	VUCA科目	技能科目	実践科目	技能科目	実践科目	技能科目
		技能科目	実践科目	技能科目	実践科目	技能科目

- ◇ 1000「入門」：大学入学前または生涯学習講座
 2000「基礎（汎用スキル）」、3000「基礎（専門分野）」：学部初年次レベル
 4000「基幹（汎用スキル）」、5000「基幹（専門分野）」：学部2年次レベル
 6000「応用」：学部3年次レベル

05

補助事業に関する経費

令和2年度

金額(円)

収支区分	補助対象経費	内訳	事業全体	山梨県立大学	山梨大学	山梨英和大学
支出	物品費	設備備品費	24,380,053	20,763,433	2,386,160	1,230,460
		消耗品費	5,762,189	3,911,142	548,840	1,302,207
		計	30,142,242	24,674,575	2,935,000	2,532,667
	人件費・謝金	人件費	3,038,193	3,038,193	0	0
		謝金	224,240	224,240	0	0
		計	3,262,433	3,262,433	0	0
	旅費	旅費(うち国内旅費)	139,857	139,857	0	0
		旅費(うち外国旅費)	0	0	0	0
		旅費(うち外国人招聘旅費)	0	0	0	0
		計	139,857	139,857	0	0
	その他	外注費	4,191,590	4,191,590	0	0
		印刷製本費	638,000	638,000	0	0
		会議費	0	0	0	0
		通信運搬費	6,250	6,250	0	0
		光熱水料	0	0	0	0
		その他(諸経費)(うち委託費以外)	0	0	0	0
		その他(諸経費)(うち委託費)	0	0	0	0
		計	4,835,840	4,835,840	0	0
	合計		38,380,372	32,912,705	2,935,000	2,532,667
収入	大学改革推進等補助金		45,740,000	39,805,000	2,935,000	3,000,000
	自己収入		0	0	0	0
	合計		45,740,000	39,805,000	2,935,000	3,000,000

令和3年度

金額(円)

収支区分	補助対象経費	内訳	事業全体	山梨県立大学	山梨大学	山梨英和大学
支出	物品費	設備備品費	2,179,608	2,179,608	0	0
		消耗品費	5,066,770	3,509,217	1,056,194	501,359
		計	7,246,378	5,688,825	1,056,194	501,359
	人件費・謝金	人件費	19,742,002	17,798,196	1,943,806	0
		謝金	1,708,111	1,708,111	0	0
		計	21,450,113	19,506,307	1,943,806	0
	旅費	旅費(うち国内旅費)	121,107	121,107	0	0
		旅費(うち外国旅費)	0	0	0	0
		旅費(うち外国人招聘旅費)	0	0	0	0
		計	121,107	121,107	0	0
	その他	外注費	9,599,660	9,599,660	0	0
		印刷製本費	3,196,050	3,196,050	0	0
		会議費	81,470	81,470	0	0
		通信運搬費	322,931	322,931	0	0
		光熱水料	0	0	0	0
		その他(諸経費)(うち委託費以外)	747,824	747,824	0	0
		その他(諸経費)(うち委託費)	0	0	0	0
		計	13,947,935	13,947,935	0	0
	合計		42,765,533	39,264,174	3,000,000	501,359
収入	大学改革推進等補助金		41,886,000	38,386,000	3,000,000	500,000
	自己収入		1,058,899	1,057,540	0	1,359
	合計		42,944,899	39,443,540	3,000,000	501,359

※令和4年4月28日 文部科学省への報告時点



<https://www.pentas.yamanashi.jp/>

問い合わせ

山梨県立大学

地域人材養成センター 社会連携課（飯田キャンパス）

〒400-0035 山梨県甲府市飯田5-11-1

TEL 055-225-5412

FAX 055-225-1150

Mail cocr-pentas@yamanashi-ken.ac.jp